忍草 下

三拾四

朱雀院乃御門はありしみゆきの後そのころほひより（六条院へ三十九）
例ならすなやみわたらせ給ふもとよりあつしく
おはしますうちにこのたひはものこゝろほそく
思されてとしころおこなひのほいふかきをきさいの
宮おはしましつるほとはよろつはゝかりきこ
えさせていままておほしとゝこほりつるを猶
その方にもよほすにやあらむ世にひさしかるまし
き心ちなんするなとのたまはせてさるへき御心
まうけともせさせ給ふ御子たちは春宮をおきたて
まつりて女宮たちをなん四所おはしましけるその
中に藤つほ（薄雲女院ノ妹 女三ノ宮ノ母也）ときこえしは先帝（桐壺ヨリ前ノ帝也 桐壺ノ叔父トアルハアヤマリ）の源氏にそおはし

おはしましゝ候まゝ坊と義くえさうせしときを
まいらせてたかさくるぬ小もさとまわらへすあし
ひとのとかめて候御うしなひもおもきにまく
うこもそれすちとなく物そのあさき事哀りしかそ
物し給はまいは清まらひ乃ほとも心ほうきすそ
大后代宮の御うみを蔭りつせゝそまはわ給てうさ
りしかなるふ人あくまそあしやうえ給なとさし程よ
けをされてみうとかも清ん乃中にいきおしき
まれよは思義こえ清き給なりうおわぬさを給よし
うはうひなくくちおしくそ世中をうしとたる
やうゆそう物語よし香清りうの女三宮をはまうさの

清中にすくれてめしきもれり思ひけしはおよ
きこえ給それなと清とし十三四りのほとおはゆかしまの
おとうむさはて座まこりわ志らんはれ世有うち
ともわてされとたのむうけまそ物し給なむやう
はらんとたゝの御すとうしあめたくおもし
あけく西山（御室仁和寺ヲサス）おはし御座してつゝはくわれててう清給ませ
ありんのとの清りうさを世はをおふまうへてまゝ
うれ宮の清も花のことをおほしいうきを給境の
うちみ座むさとなく物清たのう物清てうと花
あはさうゆもいまはうのなき御あうひもれまて
すこしゆくあはかまわあはたゝこひ清りさう也

やうそまほしきを見てこれはおくをなんしと
みこたちはおほむおほむかむともわかくあまたおはい
かくあれはなやこみうへてよ残を見させたまふへき義
御おほ後はうひりなんときうきを見てわさらを
妙へ里をゝ女御もうひ參こえはきを見て侍りわれ
へきすくまうあはおもわしめしをあしさわしうせ
宮のかくておはしましはすくさのかまわなくあて
たけまはとしう後乃は摂政こまやうふきさうえうは
はを見たわ宮中もろのこと残たもち見りむ
は心はうひなと幾ことまて世をを見はとし乃あと
よわはいとよくおとなひさを見てはうしろ〻六も

こなさすなさう後くしかゝぬなうひかりの
しゝ家まへはいとうしろやすく思残えさを見せ
世ふうゝみおこわ事も侍らは女宮さら乃はまさ
はこうわやくまはりさきを抄りひ唐るなんさゝぬ
おまゝも海すなわぬへうわかるさおくの人の
うへかえきてしかも女いあゝ後まわかうふあは
あはしく人りおとしめらるゝすくさあはなん
いとロおしくうれしきいつまをも思ふやうなるん
は世をははまくたりつきて御心留めておわり
たつきよそう乃中ようし後ゝあとあはれさは
かも思ゆはわ侍るこ宮なんいとけなきちりひをそ

たゞひとりをみるもしこさ物となげひてうちすて
ちん枝のまふたゝまひさゞへんあといゆくらし
はめたくおもしを侍ゆるほめなりのうひつしあえ
あるきさを申女にも心うはくしなほまこの歳らえ
つきさうを申さま定もゝ女佛乃人まわれハまさわて
ともめきぬしふ哭なりとみまりし申しなと侍
なりうひともえうほけしうさわしまいらせ
あこうわふてけまい歯ハりきとふくうとなくとも
歯あとにん心ゆくめて思ひうしろさんとまていお侍
さふはりやとうをしそうう侍うつしあさゆふあり
あのはこと哉れほしあけく年くれゆくまゝよ

はあ座こまあとよ哉もくなわ歯さうきを申てみまとの
いかうふもいてさうを申りほかにまみけふてとおもく
あやまりを申あともわはまさといへもくうちりんを
座こあさきさまよはおもしまさしてをはるを仏たひハ
あをあきうわなわとおもしめしうわ佛くうぬあ
はうせたまへまとな哉をみせりたのゝうあさて
まはわ申へる人てハいまも分りしくめてたまは
はわまみをこ後やわ両ふ歯いわはうふまはらき皆
りきまハ心をはくしてむしみきさこ申ふ六條院
まわとはとゆうひまはしくあわ乃はうゝもまいわ
あまふへ義まし三こうしめして院ハいとまほうひ

歳ころえ法き殿中納言乃きさを通りわ殿へ原とえん乃
うちりめしゆきて御まれかくらこまやのなわ
朱雀院のうへ乃ゆきのハれきさえり何まらの法堂云
わかし中ありこの院れ法ことい通れうちの法
ことなんとわわさての殿ひをきし給ふおやをと
なりてことかきわたりかなれうおしくの法んよきい
うれしなりくるなたことのあやまわふちく給
をうさ連たそまほふこともあわりんと思ふ給とは
ことふ申連てられうることのうしたまへ給をまふを
あんもくしたまきぬきのしき人とい通とみの
うへよなわぬ連いるたうひてんうとまよかなくれ

うれむくひえくゆりめふすなんゆりしへたり
おかうわく給りのなくむおわふりのそれ法こ給りん
かこ給ふへうくむと世人もなをもむを類く給をつ舟
みたのひすくし殿て其家なとみもんをすきやを
所ふゆきのりてまふかくたくしうおへき中むなわ
むほひうりし殿へふもおなわなくう給ゆへわりひ
なりくおよのなるおあ給ふうんてられ道乃やえよ
去まりまりてをなく給法まよやとて中くよりの
あとに字へえおちふ給法まよそ持ふ肉の法るすい
うれ法堂云ふうへは法すうまは通てしうはうく
ほへ乃よれ法きるけよきをとてきまりうの御

おもてをもおこし給ふたいのさとに心をうつましくなん
この君達乃けり寺のほいかしへのうちとかうへて
ゆかしく覚侍りなくなんおほえ給ふたいめんあり
此御へ参ると之も侍らわかならはくるしつるひ
あれしたまふへ参らしもよかし中納言へなとうち
志かたまはくの給ひは中納言乃君はふ侍るにこそん
うらみともかくもおもふあまりへ世をかさく侍らし
将かわの侍ておほやけの御もはかりまほかわか侍らさ
世乃ことをたえぬまへまかわかくは給ふ入大中納言乃
うちりはきてもうれしくのさほへ参物語なと此
はいそのもゆかしへあられりしこさしとあわてなん

なとうちはめやかにさなくおはしは侍らは御覧せらるく
おほやけの御つかへをはなうまつらさして志侍
りなん思ひをきゐ所なんとひとへにうこかぬし
のちはなましとも志らぬやうにて故院の御遺言の
事もえはうまつらは御位の御かはしましし世
よりはひ乃ほとも君の御ためはいかもなよひはうし
こよなうなんの人くおほくそそれ心さしをとけて御
らんさう滅しともなうおさまくまはかおさとを
まわて志侍らふおもしまはは御ひんのうちなを滿
なくまいわうけたまはりてまほしきを侍まつり
あまはなく願を参るよすほひまそをのほう

月日をすぐすほどにことなんおほくなりける中納
なと嬰し給ふ二十ばかりまでは独りなる事となきまと
いとよくとくのひすくしてかくうちもさうわり
ふかひていえしまきよしなるを清めよからぬめて
うち海もゝを給はくこれもそわ侍らすを経卿宮の
はうしろにあまたをやかとひと志まをおもしすわ
きわお侍さおもしろのわかりいまいはくはなま
みさわとなとしら給んえぬはまよきてしかいと
おもしかわしを見てやはふ越うさはやふ弥たく
思ふ心とうちはまとの給りはふはけしよ残りつゝ
の給えすふしとようとあやしく思ひ見えくるすり

御ひあらめやをかくおもしおはりひてさ御へきこひと
おもしもおもりそころ給ふすく世をもおもひたまふまで
ちやとなんおかしの給りとふるなのはかくまれ
きて給ふたまわおわけまでいさやうのすちまやとは
おもひ侍までにぬとあるらえ見ゆかるまも侍りいふへ
きこえさせんたてまつくしはことに侍る無男小は
まうともさぬるひうさをわくとなんとりわ給ふうしを
かくぬ女房などはのうき見えまゐて立のうくもみえ
給ふかちゝうりかいなめてたかゆかは侍まわて
心ゆるをたいきるへるかいそさまともおもかれ流れの
はかわにおはきしはうかさ御み兄かはら庵寛

おいさわいやしめともやかなしきさかりによ此しお
しられといひ志けうしをまいらしめしてまいらせり
うまいはとはまちとなむし人をかしいゐいまゐる
きよ小もの〳〵ひゐきをそひうるとはさまをゆふへきう
まやゆうえゆゐよはひなんいゆうかきてまよふ
うゐはし ちてりのくしきうこりみまへ
いはくしをあき屋の小めもをよりおんちゐるを又
うちとけてたえかまへことはもいひことたまへうへい
うみかさりはきてはよゐ物あくあいこさやうはふ
あはりしくうはをきさことみあるひなむふうよよ
はわかさはまなよさとも志まのよみしくるらまて

めはらうなる人のかほかたちなわ宮此うちりしをひ出て
ていわうのかみをわなくうれしき物よ志りひさは
うわあてりし侍よ御よかへそおほかしるわしうや
んのまへ小もきこえはひけしてせうりうち小は姉君
よものうらひ給よきうしひとりはまうまてや事おも
大将のうけ給へまいらんそれありさまをいとこよなく
さゝみよさめあえはふくのみれおかえの侍さる
なめわりしまことにうよめのさえ心もちぬ
なとはさまもかきくをとふましくおやまわても
をよそを侍さるをたる御ゆえいとこゆうなるめてたなと
めてはきおとゞのいとうつくしけにてわかく

なまんなき御事有様なる城見えたそまは里殿にも見ん
りやしまゐらせ給ハまうさこといなかせことなれ
えかくしをしへやうけんひとみたし給へる
むすむよあけけるえもやなと思し給なとおしむ
はるみせともめし出てはまきの君乃うなとの給
りはふついそありし六條乃おとゝ式部卿のみこ乃
むすめにおほしそてりんやうりこのこやをはほ
うわてえるまん人もうれしたく人のなかにもおち
かすかなは中宮はうゐのゑつきくの女御達
とそもいと尽んしと知るなきわものきる事あり
まうくしきうしろなくてさやうのまうらひ

いとなかうくなからむこの権中納言乃御むすめのひとま
あわはるほおうちうはめてあうんやるを座りわけまし
わかけまといとときざくにおかれは我たのかしけ
なる人ありはめのをとこの御かまし中納言てりとこよわ
いとまめひとかて年比も我かにんをうきて
かうさ後よ思ひうはするにくまい侍るへさおかうのあり
そみおかりひうなひてはいとくゆるくかさ侍ゝし
まみ院よう中くな我わかなるにはきても人を
ゆしくおかゝ源んをうんいも見せはきあ
まみ中ありもをほんすなる御孫のひあうくて
おう院なとをまもいかまのわけまうくあうまきゝえ給

なきせにうちにはいそそれにかきぬあさけしうかいひとと
うしろめさけはさとはの給ひれきとんありしはまうて乃
おうふかうし侍らひそめさ給ふしうるへき事ありひ屯
あわとも前栽座よてわやりはまりさとめたるふさく
さりやゆつかひを中きそえまふしなとものかしめた
へしはおとなすこしもよいまてわうきんと思ひん
女とも心さえおとしきいりそれ人乃はたかに御かい
ふ事なとをまほしけはさいり給ふく見くさ見よれ
おひたいらはうわんゆくはわき給ありてうろすく
侍まかしけれさわきせ女なりハれなりいるうる宮わ
ともかきれむはひよわかりましわかくりし時なと

さかんおかくしまして女のわきむかまんたいを
ことり里や心ある乃給わせて給んれうちたり女の
たれ侍事もおかしおゝかゝ座しそれ侍ちし給を
ともの御かわをとくし事侍めれとのきう心さ
たゝ中辨な所の院乃たゝさしき人やそとうな
侍うちまいりふなきかこのたやゆきか心よをことをすて
さ御ゝ座はまいわふ給はあひて物語侍るはいそて女
うへなんしかく侍気さて事え給しせうそれ
院よおわかるもしし宮侍を給へそこなちい
ひとわかりしまいらうを例のことかきせうちはま
さま小侍きて出るちまをさておは侍なりのよは侍そ

てもはらし給みし給人あはハなのりし　ぞなわ
うへを通あそまほまそまさ成らう侍に思ひ給へ義
ひとえ本けまハなのきは侍かうまう侍とそもなる
はうわの寝侍う人ゑかりあうむわつのんひとつめしも
あうてをのはうつおゑひのお乃すもおはしまし
うなくいたやき哉こえもあうむとききのれりつのさ成よ
うはまはらりしかうむはらんすぶよ小ともうくを
これはうすさうまわさうは侍らうまはわすくなん
お成へ義りしこふよすちと哉う思ふとをんないい化
すくをささめ難きたりしまん涙なきはちう所す
あけりしまうくあまうの御中にとわわささえ

さき給み侍きてもひ人のうをあへうめ侍をいうて
ちわもけ人まらし少うりこらふよ哉いうなるへ義
侍ちとみのはうむ院いあやしききまて侍んなうく
うわ小てもたえうめたまの人ぶ人え侍う給と侍どわたる
我もみさしもふうくらさわるはなかくあり
侍きて我とわ給ひ侍くあまさ侍とへやき妙へまと
庭むちとなくあわしたるいかまわあわてひとうき
本め連ハうれ本きとよわてうひな老本侍き成母
志給うこくうかおかのめぶを侍すくせあわて
りしさやうよおりしま侍やうにあうをいえしよ
人と思ひともたち本うひて本し本ち給ふすた

えあしとありえうら陰まとあいうくとようのう
あくあとはわてなんおかゆかうゆはい此よ北さりのえ
はゑの世りはかて男にんもとあきことはかなを
女乃はちまそなん人によとあきもおもひわか心小を
あうぬおとも御陰となんつきみうちくのすきひ
ことゆもおほし此頃りは御陰けりなのまうり
めんたそまほふまもさなんおりしまりくるくり
はきてはうけよかくし頃へ陰人かんなき人なりん
たちくるまほさいふはもみし頃いよとあきおある
たゝ人ともめて院におはわき陰よなすくふへき覚え
ぐふ陰やいおはきめ陰されよおなしきはなくは

さもおはし陰さいいうふたくひたる陰はりひ
あらんとうるゝふをめにとまる事のついそり
たまうく御世あより乃頃陰か御にめうし侍わ
しうひうに院よはかなくんうけひさゆしはき結
てんとし此乃御かいうあひておりしぬへきこと
おるをとなくの陰ゆるまあとりあわぬへくい
陰ふ人我こえんとなん中侍し我いのなかへきうと
ふうハ侍らんおとくろりはきてひとのきいく
おりしわさまんへて御熱さ陰ん御よよにし頃
なまとたく人かふ又うし陰し思ふ人たちなるひ
たるとき人に陰りぬしとまし侍ふを先はまししき
ヨロシカラスーノ

すりや侍らむはうしろこのちみなる人こそいまゝて
物志なるめわよくおもりしめしさこめてあるよく侍る
めなるまめわなき人とや申まいまの世はやうとそハ
これなつ深う（アキラカニ）ふかき所へりしく事城は心とすくし
なほへまよもたりし後すへかんめるをひめ高いあき
ましく物語はのなく人語なくてとてくちを語り
さふらふ人にハはなうま侍るなさわありけらめ大
うこのはんをきてよきさうひきそえてちかしき
志も人もなひなさぬるぬあうたよわはなるよは
へうめとわるそたる御うし後見とのしたまをを
さるむるおもる後見す我わきさになん侍るへきなめ

きこゆしおりひたとありけるわかなんみこたちの
よはひよろる有様ハうちそめはくしきやうなるも
あはまうたゆきさおもらいゑとも女たかとこにこゆ
はよ侍きそあるくやしけなるうもめさる志きき
思ひもなのはうしうち事まし所も此なめ送りく侍ハ
んくなしをおりひみこみるをまとさ所へよ人よき
とくれてみせうけともになぬるのちんをたてて
世事ありすくさんさとも若は人のんたいりうすそ
よふゆ所さ所まし此程のうり名は思ひなよよぬ
物となりひ子わきん此まの世かんはそくしく
えたわうれしきことをふいよゆまて紫うのめる

りし昨日まではつきおやの衣りありめしつまりし
はかれしひとのむすめなれとふハに歳くしく
くされるきみのはは親ともみなたちわきむかまて
おきおやのおもてとふきうきをりはうしまるた
くひおかきさゆるいひおもて御尊ハ父母なをしなと
なわ種々み涙にてすくせなといふ承保ちとえたつわ
うちきわきみまいよ清門りうしろめさきなんさ
へくあしくもよくもさるへき人民ちゝ病りゆゑ
し侍きこゝろまてみて世中をすくすをはぐきく
まてはのよにおは侍へはうとさもし清子ゝのおや
まちありいかなれはかへてこよな義さいえいあわ

めやすきこともありけるおかしきかくてしもけりうる
さわきわたしもゆまとなる残りたちまちぬとおきて涙を
なる種いたやよろつ清さる所へきさ人もゆるさぬに
ゝ残はうしの悲ひわきまていそてたるなんも女也母は
ましいことなきはいとも涙ゆるわきなるおもし家
たく人のなりけりひとそてたるおりはけく心はよなを
ことなわ母はうしのんよわはなきておくへ義小も
あらぬとおりふんよわりけに人めもみえすくせの
種さとめうきんなむいとう残くしとも母のあて
あけはわき涙をしんかう涙ゝすなほとおやしく
もあはれなうこ残さ涙まやとの御め給御ははま

なるをこれつまの心にまかせてとてもかくてもおしきこゆ侍
さやうなることのよりもわいてんことゝいやしうき
ふとなわなと見えてあてまほわおほりんのちのよ哉
うしろめたさは思ひきこえさせ給へきはいつよく
もはらりしくやりひおへ里に母はしもみれをも思
さわおほやかとまそて見すくさむとこういとこしゆうえん
しつふをふうきかいもとはなわぬへ夫人ちの
すゞろに思ひもよかされてなんのみれ六條のおはしは
かくまさるゝともしみしうおほえそうしたる屋はまうさい
ここなつわなんをおくゝりおまさりのぞうふ
へ夫人ゝ哉あるへきさまもあるまさうしとてものく

てもくへのんうゝなわのとうふおちぬておかうさの
よみれなあしともうし給やはふうさいなしひあくね
をうるゝ人なわけゝてよ給しうの給へきひとたま
はつわうゝはあるむ共部に宅人かうゝいめやすうし
おなしすちめくことゝ人とわさまへおとしむへ夫
よ是あゝ車とはまつまいたく（十二ニテタルト云心ソ）あすひよしめくおとよ
おもきうこをくれしてすこしあろひゝ給おおれとや
まくこうあくしん御はらふ人をいとなのりけなく
なんおほまく大納言の御むすめはうさのうゑなる
ふほうゝりもみれまあ屋のなるへきうまはなな
まとさはうあいりのありうやさやうあすなへたる

きはくなきめさましきみなんおほへ夷もわりしもよりり
やうめるえうひまはおうも人ようしとなうおほえ
あるまゝとよりてうわけまたくひとへよまうさ
なくまちゐんかくこそうりそうしこゝにおもひ
さゝめんきいとはうれくちおしうるへ夷わさよ
なるに太宰の大弐のきさいふわふなるよし肉竹替のあれ（柏木尚母　朧月夜）
きこれしうれ人はうわなんくるゐなととすし
紬めしおやとよなわなれなとうれとも思ようね
へ夷なまうこといとわうくむけよう給ひたるなと
なわうのおんさしふうくてやもめみそもしはく
いさくまほまり思おりまほ候しまひとふはぬをそ

さえなともさこしなくはみうふいよれうさめゆう
なほへきさ人なきハゆくゑもたのもしけまとな給ふ
うれたあふとおもひたてんふはかまわうはうやと
ものよおもりまはうひさわかけやうゆをおもり
よくぬおの宮うちなをかけても宮へなやまし給ふ
人もなしおやしくうちくにの給ハゐるはさし
めきさ中将ものをのはうし侍らわてんをはくは
人くおほうわうわおほおほとくもうれ大弐の替乃
ときそひとわ乃くおわてみこたちなくれいたしと
思くふとうまいはさうめとゝもいてきゝなうおわふ
さやうりもおもむけたてまほまてめしよきらま

すゝん時のちうわわりつゝあふもめんぼくあわて
られしかりむとありしの給て因幡かんのきゝ
かれのみえのわかのかくしてはく人中給ふかくわ
よ給内ちかぬなる義之が弟子をはくして持うせ法を
はからき給りしを給紫宮に宮えた大将乃御の方誠
宰相はし給てきて給りむとこ給もあわうこと
なくむ事をとえわすくし給よいつのゝ八條こ給れ
うこりさうむ保ちく相別しいろまたかわ我大納言い
新法院のへふうよてまさしくつまうまはわて
はふらひなを道ちたるを御山こもわき給なんのち
まわ所なくんほうう院へ参るを此宮れ法うしるさふ

すゝませてうつわえん法を給へく法のしきをちろり
給りを給ふみ院へし權中納言もかの院つりとも我
きて給よ入はくかもわつもさはうわれもむけさを
給へまゝし法をつましをえんてまはわてうい宮の
はかしたよわは法をてもうし我こしめさすふ
すもはうハよとむてまふきそてハあるしうしとん
とふめきさも志法へけきゆる世きえのいまりゆうもち
とけて女乃と於へるをとし法はしきゆもうと法をつ
通りまし給へまゆのご海乃こ給をとなくてすく
てしをあやふくにいまのさうわ方ちようへまゆれうふ
またなやおもくきさこえんなのめなしれ庭むこと

なきかなしみかくはらひなかなかなることもおもひふまく
あらてひさしたよ座はうしはいわか男をくるしを
あらいあらめのとよわはぶくしかくぬ人あれ
おりひき侍めはくうちいて〓とはきこのふおはまよ
ささまわれそ給りんもいのようやおかえてみてえ
とまわくわ喜ふもおもし給ひともおしめして
さしおもわたるんめくいまれことよわものちの世れ
ためしともなるへきおもひとなるをよくおもひしめし
めくらはへ養ことなわ人ありよ給しとてもたく
人をかさわある段あをしっおかりし彼方となるは
ば六条院よあうおやさ歳よゆつわきこえさを給い

めのとあんわきとの御せうそこありいあらぬ〓と侍
きしまおわり歳をまちぶうを給てもきよはやおもひと
なわいとよくれはしの給すきたわといよくは
んだくを給てまはうれ舞してうちはくはない（関白為頼）
ばさへゆくさを皆く歳これ寒のはすかくおかり
まはらみさ歳いさ記くもみえかやをきたまへまい
あら給くはしき御おとよもはなるう孔さはわ
とて他院の法世乃孫わすくなしとてこくふもみ
いまえくたちをくれよそてまつらへしとてそれ御し
うち給えのことなやうけとわやえむけよろこびを
あやまるぬかていまきよりしのかともいこ重ときま歳

かきわめつゝいおほよそにはきてはいろつまてれ侍ら
たち城もようありきてまちたそまはるへ義ゆも
おゝ絵とまゝかくとわわさてきてまいそまはわ
てんなるしとにあそうし給ゝ参ゝゝめとおかりゝを
それゝまいと不定なる世のさゝめなさなわやわ
の絵てましてひとへよみまれあそまはるへき
すちよむ侍ひきゝえんことといと申くようち
侍ゝおよを侍ゝむきさえ心なるしを为侍るの
たゝふもあさうゝぬかゝしよなんあ條へ義中納言
なとはとしわのくうるしゝよやうなまとり
侍きと深くそ人りゝもつ手に大臣の侍うし給ゝ

ともおぬへ義生おなめまハさうもあかしよのゝ世よ
なとりこゝよなりゝむきされといひいさくまあなちて
思ふ人さゝまわゆそうはあまはされよはすあゝせ
給ふまやあゝ世なとの給ひて为侍るハおかし
まふれさ條なるを譲いおや給けの御さゝめ
まもあゝぬをうくわゝまんへえいとおしくもくら
おしくも思ひてうちくにおりしたちふたるさ條
なとなりしく参ゝ御まいはとのふおもゝ侍くいと
われしく志ある給みこなあまとはなり絶ありうく
きしのさりさきのたとわもふうきなめわうしふ
たくうちありあるそ給さめ座んことなきまはれ

人〻おほかるといふ事ハよしなきことなりさまは
さるへき事こそ心もはつかしけれさわとそれにつけ
の人なきかなやうもなし后院の御時より大后(キサイ)の
たうれはしめ女御にていきすの院(イロイノアル)にしにもと
むけのすゑより事かはりまし入道宮はましりて
越されにおはしつのみならず清母女院うるはしれ
宮の御かたに越し給けめかたちまさし給よ
心はわとのすいかなれ給しひとなりにては給
すよは給てもこのひめ宮をすなくてのきさきには
よもあはきしをなとりふりしくは思ひやすく給へし
年も皆ぬ朱雀院にはほんちかなしたるはましも

たりしまでいはねはおほかたしくおほしはして
はしきのはかなしいうくふ御きしうてゆく
さきさき皆けふまでいはくしものそちて御志は
らひいつ(檀)后のおしおもてはおすわりしめて
このあやめしきいまさきを給ひはまはしし乃(嵯峨天皇ノ御トノ)
きさきのかきらをおほしやわてうふりなとと
ことしくかく后くはうわかこの人はき給へ里は
うしゆひめれもはきおとくせうかてよわ家さき
たまへ里けまさことくしおはすふひとまて
まいかかくおほしけまと院乃はうりともし
まわせ給ゆ中給いうせてまいわ給をと両乃大后(オトヽイ)連

そおまへの上達部なとはいはゝあさきさりたまおほなとはな
うちよりためしにひたすきをたまはりてふたちの人
殿上人はみなさふらふもいりはうち春宮のおほん四条
はとひてうりめしき御いりきさきの院の
はすのはたひとちめなまとち春宮左衛門
まはれてんくるしきさうしめしはく殿人御おさめ
殿のかゝ物ともおほくまうしを給へるに六条院よりも
御とゝのひなとありしをくわともみえとも人にみ
緑君(ソンザ)の大臣のはつあかる物なと故院よりすまうを給
きはの中宮(秋好)よりもはきうちくましみえこんなとよ
てうきさうを給てりみ若菜の御はくしはいの奥ゆへはる

はまふあはれたゝあまたかへてさふらはれはかのもとのかんりんと
うしふかりはそれとみえきそてよみたひのみはかなるさまま
はを給ふ宮(中宮ノ権ノスケ)のすけ権のすけを院の殿上のもさおほふしを御
使は姫宮の御方よりまいりひへくの給ふをはまと
かの御事の中宮にあはれなる
(秋好)さしなりし昔とはことにふまへ玉のこそ
猿ひゆふ冷泉院御悩し給てはしかしかあり
むらはまたともあはれあかえ物をまうい(ロウカリモノ)あくしと
ゆつかきこえたまへふかとのまかもたくましかん
さしなまいは世しもせうしの恩をなさし通て
(朱雀)さしはなれ(カナヤシ)たる物かもかなしの世をはな

たゞし此かたさまにまでとゞり給きこえ給へる御
んちにとまりこさなるんしはゝおかりおうして
うれ侍りうさるそぬ遣ハ三日過して七日に侍らし
おろし給ふよはしき殿乃人成うへにさくたるに以まは
とてさ被かるるハかなしけ多るるワさなまゝハましく
以と然々に御方ゝもおかし被也に内侍の母乃
主ハ侍とはるゝひ給ていうしくおかりいかたるを
うしらへとる給て宇治おりふたたはあわれわのうく
思ひまはゝ皓へはおれ是ろうさくもあ侍ら礼とて
はんみな遣ぬへけまとはなりちに侍けうくうり
給ひる遣給て山乃座主にまわりしめて御い母ことれ

あまた三人まゐりてはうふくなとも東海道此世を
別給ふ侍さはうゝえしくかれしくふハ世を思ひ
すましたる僧達なとゝる後もえ心ゝめまかりまして
母宮たち母御更衣こらの男をんなの見えても
ゆゝわみちてな参どよむよいとんあはたゝしう
ましらて静なる所に座りてこも侍へくおかしまう
けゝ侍かいふりひそむほしめさ侍しもたくこれ
おさな義宮よひおされてとおかしの給ひ御内より
姫宮わて侍とゝひれ志けさいとさり也六条院を
はしまんちよ給しくとやまらを給て参給ふ御
うりるのみぬなとよりかんなおかしことおわぬの

みかとひとくたりまいらせ給へとはまことのたゝ
天皇の儀式にはうけりの御まへよりもてなし思ひ
やましきるさ歟なといんちとなま心としくさうにて義
給て例のさとくしかゝぬは車すり参りて
よそ参やなとふはへ義参てゐ東二てうつりまいらは
たまへにて院にはいえしく御悦ひきこえさせ給て
くはしおはんちをおほしはよわてゐ対面あるへは
りしきさまなるれたくおはしましつゝ有りおほし
よろひまりんへて御まへ東御所にかゝりるを給へ御ゐたる様
見なまはせありきしかとりさ給くれてうかゝく
とゝめかくあかはやふ参らいとみえりもえためゝひ

給りもとあ院よりさはくれまゝしけはひよわかれてつる
ふく思给へられしかはしけるのかいふかくはゝ見
なほも尽に給はよそく思ふに給へてたくよふふさとの見
給はふつ井にかくえんたそてまゐわかし給ますてたくれ
ふそてまゐわぬふんの御ふさをたつりく思ふ給へ
らふつかれ力ありとわてはいとよもあ院ましなき
思たまへんたちはおかくくあるをさつりいと思ひ
うちよこと給ふわぬへまわさにさる給はせまつ
なくさあるしく御覧かしたれは院も御心ほりてお給ふ
さはくよえまへ給はよりくひうちときにたまへ給はく
ゆめしへいはれはるのかたわいとよりけよきこえ

うせ給て久しふりあはれをもおかしく侍べしほとりに雅
庵ぬるをとうちたゆみてふるきかいのはしめても
とけもなれなんすと思ひたうしてなんかくても
かこわのよりひなくハなをこなひのんさしまかなふ
ましけ也心うまはうわかそもれあと見我まて念仏を
さふと思侍るをのくしかくぬ身にても世り
なすうみるこをたくらのこ給さしふひきとあるま
たると思ふ給へ志うまぬうしもあらぬをいまて
つとめなまなましたわをたり庭のうしはなんとそ
おほし棄て御なさ給なとをりしくの給ハける
はりて小世みこたちをはましうちすて侍なん御給
くるしおかしうも思ゆはけるかなをさなきなんとわかまて
うし給めしくみまほらひ侍とてまたまはあらぬ侍
ひしきをうら給をうしをとあそまつわ給侍ふう給の
うれしうも侍をうふ給てかしお御しはわれ給ふまい
あわりすくしうさてそ久またて人よわまかう御
はちハわさくしさ給の侍うし給をあきいくちおし
けふ御わきになん侍久わ表意うくておりしまをハ
いとをしうおすゑの世けまうけのきをかうわあれ
さこれたのえ歌よあふな覚えさすふをましてうれ
侍うとまとをうをたまりんしといへこととうして
おろかうのふう給め中折んさまを侍うてハさうらり

ゆくさきのこともおほしなやむへきにもはゝかると
けふりはなにはおほやけとなりおひたちのまゝはま
ことはまうけよきみにへしとはいひなりし女のは
さあるなまめかしのけさ屋のなるはんよきあはへき
ゆめはかりさわきわけへて女のはたおかれさるく
はことのはうしろにとすへきもわいちはさるへき
すちかり数里をうれしえさくぬおとよりくまた
義とゆかりはまもわめ侍るなせうし給屋にうるへき
あとよ侍ふ成なをきぬてのちのよの御うつりひ
のこはへくいよ給し義におほしえうひて思て
はふへきはけけりをさるめとうをおへきよなん

侍るなるを委しうさやうに思ひよはことははまと
これもうしてきことにかせ地人になしへのためし
をきて侍ふにも世をたもはさうわれとこりける
人はえるひてかはさは事をしすへかたくひ
おほりわかりましてうくとかくとのよの世をするなる
きこえすてうとくしく思ふ義にもおしひとまる
きこえつみ中にも捨かくさき事あわてさはくに
思ひはたいえむほとにやまひは我もいつゆくみとわ
かへすへきにもはかりぬ月日まかにけれはあはたく
まくなんありかいたきゆつわなきとこのいはけ
なき御親王ひとりわれかさてよくみかおほしてさは

へ参り給ひのなをも侍らんにおはし　さらめては侍るをりへ
と申しまかり　北の方摂津中納言などのひとわ物え侍る
経ありきしみな殿へくしうあわけまいらかいまうち
きみにをんをくまて孫たくおわし侍ると聞こえ給
中納言殿はまめ屋のなるかへいとよくつかう
ま川里ぬへく侍るとて何事もまうしはべくてたとわ
すくなくこそ侍るめうたしけなくともふうきん
みそうし給ひきこえさう侍るんありおりしまの侍
うきよかりわていおかさわしをたくりさまてし
かくて侍ようまゐはわさひのや侍らんとうとうハ
しまぬうこのかなんこ給ましく侍ぬへ参とけ

ひがし中務宮殿にへのぬまではおもしの院うこともまうう
よの上達部たちもかなに侍前にて侍あはれしの事
さうじ（精こもこし）北まそうはりしうにまめうしくせさうを
なへるに院乃侍まへにきんまう（沈香のニ北ヒノ浦キ木く）れうけりんに侍たち
なと者にありわてまいらをへく殿をしゐらひ給宮
なるすちのうつとしはまとうはさけまいかくす夜
ふきてうへわ給孫ともはなく小給別当大納言も
はをくわりはいわ給おはし此院いつふのゆきさに
いとく御風さえてまてつきみなわなやなしく
おほさはまとうのき此御事申へくさらめはるを
おもひやすくおはしのわ六条院をなは心くはう

さなくおかしこなむしききさきの上もかくなる御
さらめなどうちきてもかれきこえけれとさしもあら
しお新院殿もさんけよ中ゝえあやうなかしうも
わきたゝしもおかしとけすなわすをあと都にして
さるすやわるともひやすえあいはなまさる給も
なくておはすふかいとおしくしすをいつかおかれ
さむ我んは露もうへふましくさる事侍らんよ
はきてはせゝいかくふうさこるなさきめみさるめ
あいさしん程いる思ひ類ひあるむなと屋ゆうもく
おほさるとのとしけと識てはなしてかさみ小海て
やえあるなく来なる中なまとはえりしんれり

海おしたることわらんもいふき義を我の秋を
うちやりとてわりあはみれ日ゆきうちふかえの
きりまも猶名に通りこけはさみれは猶かえてし
かりし新院のためりけなくなる侍りたる御
とふとひる条て恭あることせ乃きつふの娘女三の
宮乃侍るをいと捨りけりおかりてきっく
なん乃あるせはゝしうかいこう侍く屋しくてえ宮ゝ
いなひす成しをこととくしくう人もいひあさん
ありしとはさ屋りれこともう丹くきく侍るは
しく思ひなわよけれた人はてにきしきえまをあえ
ふはとうくのれもすゝしをたいめんの侍りそよ

みふつきさいはなりにしことゝもその事ひはゝかりし
まさえすくくしくもかくさひやさてなんふつき
清山はゝりうはるひ給ひん雅りうかはりう
奉うめあはれなくやも月は宮へ寒いやうしきす
あわともさゝめあはせよかたるすいさうにあは
ましき様ら給ふ奉き竹ひうよのれ清たあちうん
くるしのうめされものたえなしはあそなしてん
給もくのとうふてまし給さなと義らえ給はり
なたはすさひすをしすめさましき物にありて
心在はりぬ御ふさはなまはいつくあかさむと
相かはよいとはまなくて君給る清ゆはわにこうは

おなまてくまはいかなる心を通はするへ義みつのめさ
まうしうくてはなをやうのめしはましくいふ心在はく
てもはなんをうれえ女御の清りくさはまても
うとかくはれほしうはまへてんやとひくし給を
はまわうう申とけ給ふ清ゆはしもいつのなまたると
うし給めてくしうあまはことはさきよおかりゆは
してわまもへもんえそなくらうふまそあしきし
給まゝいよく君になんひよいとやさしなときんへれ
事とまいまた給ふ奉すへてうれ人のくちといふうの
なんさのいひ出るすさあく奉のはうう人れなう
らひ奉とうちはくゆかしく思ひは奉るすいそ奉は

物語のなかをんひとつにまとめて侍らせ給へりさるさ
りふあんまれまるゝぶみ侍らはきそあひなれ物なし
給なといとよくなし へ哀れ給ん乃うちにもうくさ
まわいてきまゝ給やうなるこそまそれかまを給くて
なさをゆくりは哀れなさし家んにりそくうわ給ひ
いさむるこそよまさうひ給へ哀をのうとちのこ給
よわなそこも給けさうすもはれせう給へき方なる
物うしおこあまし也ありひむさとはゆへさ給世
人にもわきこえし式部卿宮の御方にすゝり
うけりしきなるこそともとの給出はくあちきなき
大将の御事まそさん侍御しく給かうもとて給たる世

うやうゆきていよいちまへるな思ひありを給ふもむ
なとおいうのなる人の侍こ給といふ事といのてうい
あはうかのゆまのいなのうんいまいにわともとのこ
わかみを思ひわうわうしなくてもしの世にかひと
わゆたれなうむこそをまへさゆは思ひはくきかへと
いとおいうこのふ乃ともそてなし給へ重年も尋ねぬ
朱雀院の女姫宮六条院にうけろひ給りんはいうれ
とし竹ふ哀を給へる人くいるくちおもしくおわ
あけくうちにも侍心うんありて哀こえ給み扇雅に
うは侍さこめを哀こしめしておわし いとまわに
きわさはいことしうようちに本給けまいは侍実乃

事におゐやきにも残りしめしすくさは世中乃いと
なくおそろしくてよわひかくをはとの乃わつらひお侍るを
いのめしたる事は昔よりかうみえこ侍るぬ侍らんまてかなしかる
うへさうひ中将に有世こ白子乃日なるに左大将殿
の少将わかなまいり侍りしてくしきをもうし侍
まそいをいさく思ひて於ほし(まうけ)けるわけまは
まはうふてえりさめりへしきこえ侍りまし志のひ
たまとさたうの御は義侍ひ奉まいわくれ侍ふ
様式なといとひしをさとせんふこ乃おもとく此両乃
まふちいてみおまりよろつ御屏風うへし侍よわり
めあるらしくえらひ志侍りいまとすかう侍はしも

いしなとはたてまつ御ちしきのまいり侍志とし
けうなくなとすへてうれ此侍ことともいとく残りなり
きさうを竹人へまゐ雅てんの見侍ふうす侍ひ御ちし
えうこよ侍すへて友名乃侍さうかくおうこに侍わの
はこにすまゆすゐ侍なかくけのたことなとやう乃
物うちて吉のうを侍よさしの竹人まゐ侍よさしの
年来よたちん志ろうん地侍くわめ侍りし吉おや
めど侍りしおなし吉うり年もさつりひなししかん
まへあわりまめしきかん此志物乃こやひふうく
うとめきさ竹人侍人おそて見なまぬさ波りしなし
竹人まゐ大方乃よろつ年はおとさうりことくし

うつぬ程なれハこゝのつなとしおてあまり
いそおとそうんの君には對面あれはんにもうちふは
いはしへあ出仕なりもさゝくなれハんし
いはしけのまきまうしまそかく御賀なといふなる
ひうらんまやとおほゆるさゝのなる光ありしく
人のおやけなくおりしまうのをめはしくてとし
月過てゝ見えるわおうに見ゆとえらりしけまちとお
けさ原のなりへてもなくて御物語せえかりしお
おさなき君もいとうはくしくそ見えしおうんの
君いうおはまても御覧せられしとの給ひしと
大将乃ゆうかはいそにすゝ御覧せさせんとて

ぬるまおさしやうよふわわきかんのなまうくなた
ゆゑしすゝとゝもまそおいのすゝる程大みはうう
乃あう給またとり思ひわかうのめくまゐらせぬく昔
なりのりのくしき有様そあらたなる事も
なまさかゝ成すきゝくのりよほしりなんとなる
りしたなさまそ思ひえうらへわれも侍らる中納言
のいはしうやしきのうけたなるとまゐらくしく
おりひ給てゝまうしうるをはりし人まわことにかうん
とわたまおきなかのみ子白あう御幸またけまちえ
りしん光をまはまてゝも侍へるまとまうえおりうんの
きこともいとよくまひまうわもみえくしきさたさん

うちそへたるうひはなさけなし所へ至
五葉はまとのへ此小松をしまよはまてまとの岩ね
をかたのなかふかせとせめて松となひゆく給ちんの
なしきよはしてはまのかさなるわ茶きわは
よりつけとわ給て
小松りくは忠の我れりひかまてやのへ此わか
なもとしをはむへ度なとゆえかけし給てとまぶ
はまるくれみ乃ひさしふはしよ給式部には成いわ
かくおかしけまとはせうすくはわく成りうく
志さしき御なりうひかそ人はる座うなくむも
されなくて日たけてうわ所へふ大將乃志たわ

うかまてかし成はなりうひりうけりまて物し
給もくまんやましけあるわさなめましとはむまうの
気色いは津のたありは色てもかわたちてさう座く
志所ふさも此ようえたおわひは物まう地中納言を
りめたちてさ成へ成給とわはく色給へ至はうれ
ら色をいわ五葉乃はは津物成いは成はまん小れちん
乃うけれんをつおかんはよとも多津あしくはま
めなよ成雅ふきられたわ朱雀院のはをはわ乃す
な成たりまれそ給り世ふすわ東人なといめさは
は留なとおかたれ給との色れうさいゆうのへ給て
世中をこ此御笑かわみめ津うしくきようはくさ

へきさりあらし此ころの御ことひてすくれたる孫乃御を
うまれてもわおかりまうけたわけまい思ひ座まつり
けれおうひわわとりわくふきるたゝふかれ婿ハうれ
それとう乃弟一のひし給ひ原はちとみわさ原ものく
上手のんをとくめて引からし給へ原孫いとなしひ
なかなかをらと人いうきたて小きくき妙へは渡つ籍乃
うさくいおゆるとをあ給へは辛まいとおもちらく
おきくれと侍ましくひく侍りを上手此つおと
いひなりうかくしおえはりぬわさうう此こら
かきく宏か人くも得は志りへ刀きさうひてあと
あ原ともさこ成まわも給らし此は大人六大中く

たつまさるへ菓うくしはうかなるを心刀まうさて
たくひさきあはきたるすうしおにま法律のものくま
此ころのへら書するはえんまおりし給くあやしき
まても々ちくおとくはこし此をもいとゆ原刀
りわていうつうくるしてきりへひのおお得くあはせ
てうつきなりし給ふられもいをわらくあり乃
お原まのな侍りしくあい菜やうつおたるをいふる
そうきもはきさえさむしとみこたちもおとゆき
給御りハ兵部卿宮ひさ給ひ侍まとハ宣陽殿の侍給
ふて代々ま弟一の名あわし侍婿球右院の末侍
うさ一品宮の只給ゆふて給りわ妙へ里乃原をせ

おほえ乃きようをほうしおりんとはるためおほとく乃
中おりをおへ成佛ほさんくをおふすよいと若よ
着のこともあしくおりし出るなれともおひなききえ
とくめおりもと清くしきとわおりてきんたれまへよ儀
義こえはを佛物の芸よえ色し竹にそめほうし記
物ひとりちうわ花義おりようとくしうう申と沢
ふくおもはおりき義乃佛遊なわさうう此人くやえ
りしよめしてすくまよ成就此ふまりわりさしして
うへわ詳よな成夜乃更りまに物乃ほうへとも
なほりしくかりわてま柳わうひおり雅くなねくる
乃常る物るぬへくりゆへしくおりし給しまうう

まちとのさ成ゆ志ふしおりて縁なといと身やうさくに
まうけくまたわなわ暁りりんの君かへわおり佛
そくわもれなとわわをわうう世をすほくる座うまそ
わうしくるは雅よ年月乃ゆり忘もまうはりか
なるをおうかうんへ志うきおへるまなはよほ[illegible]てはん
ほうきなん国しいおりたひ座まよはとみ竹ひくる庵
ようしうくゆるめうしよ兆此事をはち思ふに志るさ
うひてあれ先なれいとくちおしきなんなとゆゑ
おりて若小もおりしくも思ひいそゆゑおりすなききに
しもおう[illegible]申くなれゆふてうくいう義わうわ
おりをいとわうりくちおしきう勧得されなるりん乃

君もゆかしとの親王はけふへ参り給ひ(?)思ひ出しはて
き難くおはしましけんをとし月にそへて
かく世にはなれてはべりしにはさながら思ひ
きこえはべりかくて二月の十余日朱雀院の
行幸六条院より嵯峨院へもけんまうけにて
つゐなれば内の御車(?)わたしまうちいそて入りけ
御たてまつりなさる一二の車のやさしさをうけて女房の
局くまそこもりまうけらひせうしせ給へまゐりに
集まりなる人々さはうをまゐらせて殿院よりおはしてゝと
おとなしきるやかにおはしましきはめたるなか
清とくわかれよき宰相などとはまさりはべりの老いし

のそゝはし大納言も座にはつゝれ思ひなりしさに
らひはべりに御車よせはべりて院わたらせはへりておろし
まゐらせなども例にかはりたまへるすとも也たゞ
入りおはしましけるに琵琶の音をさまはれてうち
まゐりたまふものむかし大きみ心にいれんまゐらす
たまひてめでさせ給ひしき中のはらひともになん
三日まで侍らせ院にもわたらせ給ひし院のさまはもと
いみじくめでたくしき給へるやひをつくし給ふ尋の
うへもことにかまへてたゞかなしとおぼされぬ世の有様
なればかくおはしけるはてゝもことなく人にかたらる
べきは事どもおはしましけるさまにありて人なく

なりひらてあそひ給ふにありおひはきよくはなはたはかり
ゆくゑもしらぬひとへてうはろひらへよりなよりした
なくおかさ所をまかせたはせなくのこりもそなしてけ
わかわかのほとも誠よりのなまこすこもしいそきて
いもうとなりけるに有常といふあわかなしゝ
ありひらかゝる物語いひけるにひとまたちいはれくるゝ
なるにおはすみやうちにもいひといひけるは義はさきてま
しかしてひとゝみちありしわかのひ始へ奉りし荒乃ゆかり
たつねとわ始へまいりしおかれはしめてまるよかまさいは
さまでいふのひあわれしを者さまいかいりけあく
のにみえ始へいよすめわゆくけふをしたちく所

すなとはいへるまゝよりめわかれはおほいに物かゝりいと
はまちゝ物乃こえなかなくさ命の郷と見まわ始三日の
程は秋かれなくわかいわ始まゝしけさもなうひ始
りぬこゝ塊に思ふまゝと秘まよ乱荒なわ消そともなと
いよくなおしめさるを始物かゝりかなりめて物し
始ふかしきいおしを程うしけふ我あしゝなとて
ちるの乃すあわせみ人を家へて見るへ家ら
あさくしくんよりくなわ全き小者候わの家こ
たわいかの所事もいそくるそよしくのけまと
中納言を老えおありうけたるわぬめわしをと
家なりりはらくありしはくけらるまに添ま候まて

と夜はかいことりまとゆるし給ひてんあはれよわ
はのとたえあらむもかなしうもんつねあるらへ
けまうさるゝやとて授戒りしこゝしめさむ事なと
思ひみるまゝ給へるは心のうちくるしきをわすれ
ほくゐつて力はかりの仏なのうちみえさせ給
まうなるをましてむとりわもなきものはこり
とまるへきふかといふうひなけよとわりかし仏へ
なりしうさんおかし給てはかつえをはふてまわ
ふし仏へまいり侍従をりよきそ
先すちうしくはまいりける無事をりて
とんせく新かはかゆることなとりまきまを給をとりて

みなてまゝ給ふ事なまとけゆとこしとりわすれて
奈あうゐゐ六給めさゝめなまよ也つきなうぬ
中の契をとやんふもえわすれ給ふぬをいとあはれ
いるさなりさうれとうゝのしやえ給へいあすくうふ
おりしま雅よえなうにほひてわすれ給をみえいさ
し給ふもいとたてまはあるにうし年はさのや
あるむと思ひしうす此もとりかへるにまそてあるま
給はさうはかくにうちとうちとけゆくにゐよ
あわくてかく世のきてみてもなのめなるぬる
のいてあぬふよ思ひさるむ義世の有様ふもあら
さるまかれいまよわ様もうし給めさくうおかしなわ

めつらしうはまたなく候きこえ侍りし折へ心つきなからふ
人ともおもひもとなる世なれやはまさ物したまふ
やうなまといはりしもこれこなたの清悲りひまた
うこさわうこうのかさ候心てもしはへはこうこと
なくなうらうふもあまたなしたちてかくれなる
有様よけたまへてもえもし給りしまくさわとそはつ
なきうよはきても座にうつぬうたはうむおわ
おわ出ま侍りしたりしとせいそ若なんよしなと
そのゝましてうちうきらひあけりしけあるを露も
みえぬやうよいと悲りひおのしく物語なと志ち
はゝ夜ぬくふまておりにかりく人のたくなるにひ

思ひたるもきこえなし心おかりてかくあまたかまた
あまりにも見えし給めまた心うけれ人なりうれひそはま
見ゆるしをすくれたるきえにもあるはとめなまて
さうくしくおかりうわけるうきの宮のうく
わうわ給こうめやいはけまたな幼わうはこ給乃う給ぬ
まやあつむつまたをもはひ若きこえてあつまあ布しおと
あひなくへうてあはさ候よ人くやとうわかさん心う
はらんひとしお雅おとまさ候なと思人よようたく
なうはえてう侍うもそのはつういそうはかわさなまた
うきさけなく心くるしき侍うなめまなはいつて
んとうれまらしとなん思ふなとのたまへは中務

中将さまなと座り此人ゝめをなきをはくはきのお
なかはは思ひ座りけるなとゆふへし昔いたくなりぬ
さはよはりひなすらし給し人ともなま心うとし
はいはゆかふはかふらひてゆかしき心すききはなかなめわ
あと侍りさくまわもいつふものほらんもとよわ
思ひたるにまゐたる人ゝは中くらは座にきなとなと
おもむきをはくとふらひゆかしえ給もあはきうくなし
はりの人より中くらしは世中もいかにつよ
な義も此なをなとてすさのゝいおもひなやまんなと
お侍にはおまわ久しきよひぬも例ならぬひとや
かのめんとこ給のかめゝあかしてへ給ぬまゝに帰し

ふたはゆくわぬまゝとゝはゆうこゆうさひしきをなく
座りたるふたもなき哉たくなりぬゝゝ体すまゝ心うこゝの
はゝの帰し別のわわとあれしいはまたいとゝうけ
となきまゝ給てもたゝおもにし世のうちよきこゝゝまらま
うれとわのかまての事いうちなきあさらしくのに
しりわしはわきなにそりしさそてる此其の紀きえり
わきとも人をいりあるゝえんは成にはしるいいふのひ
あるし世うかいとおとしみなをしかいるゝ座夜の
恋ひひゑ座てあふうてふともいくゝれ給りぬをたる
くさふゝふ人ゝあやしとやきうんとうちもうし
給さ給りぬもかいとくなりしけふわ秋ふりききねるの

あすの空にくるも物悲なかわかさとほしとには
あけぬとうやうに思ひみられ給ふきよやかに御
夢にみえ給けまはおほとなき給てりけるかなしくは
ありし給よる乃孫まち出給へまては武にてきも
しらはかなにいりきたけるをいとたけなるはわ
さはなまぬめにやうたちまくさはらひゆかほまこと
をしはきて出給なれきわをくる園乃空に雲にかし
みえておもはれらのあしる露ますそまま御ふたひ
風にはあやなしと雅こくに雲はあれに消ゆはかなる
いとしたき夜の梅をけちめなくわのまぬ程なるに
なをのこれる山はとしめのひ風よくちすさみ給はく

みかうしうちぬくむかしもひさししくかしあけつ
なつかしけるなごひけり人ぐもうしねを志はく風
まさをまわてひさけ落にわらよなくひさしうも
はるよろもひえ入り給はいをち覚ゆる心のなやみ
あくぬようほめまさ給えはてもあしやとて伝う
ひまやかなと志給ふにすてしぬまたる涙ひとへの
袖をひさかくしてうらもなくなほうしおもはれ
のうちうちとけてつゆあかぬはようといなといひけりは
しくはおのしはな美人ときこゆまとうることのめは
世をとおもりくるへきはよ給門いすもし人乃すを
おもしいではくとけりて妻はくしきを御覧し給て

その日ハくらし給へまたえわすれかねてきん殿
にはゝきゝうちこそさうやかれけさのゆきさふらんちかや
まはていとなやましく侍るまいらせ候ハんまゝに
ためしひ侍るとおはしめせとさうちさえ侍れと
そのかはしく気おそりいえさはこゝになる事なの
御返事とおほし院に残しめさん事もいと
おしこれそ給ふかは候へしとおほさえさも
ありぬべきはおもひしことうしはなかるへしと
みえはかり思ひはゞけれ共又母君も思ひの外わなき御
んの姉とさまのしうわかれけれは御例の席すりおほ
とのこもり給ひてさいつ居の侍方よりほりけ候まゝ

れことなりえつりしけもなかれはさ候なきと御筆
なとのひまをゝくらひて志らきかゝえり
中みちさせ参らする雅たちかけまとも成んみてはり
けさのあはさ雪梅に侍るを給へ主人めしていわく
母よりかきなりをとの序をそみえりをしてまいし
ちかくおりしまは志るな御うとも在残れてなを
まきくれつなますまゆきのなれうるおさまらへよ
おちらわらに雪を添給へ参る乃わの序のにちゝかき
の梅のはなようちなきたると袖うちかへると花を
そ義うくしてえはなしわくてなゝめ給へふさは
夢にもうら人のおもやにておもおもくうぬとみえ

おもひはかりのうな成めうしよ清さう成なれ清かへり
すこし雲かゝるへちすまいりおもて世先よ花を見るを
春わ思花といひそしかくちりかたハまほしけれ
桜より清しては又ちわはれわもんわく方なくや
わろましなとの思ひあまきもあまりにけ清ちぬほと
めでまほしや わらむ花の盛になりへてみえりや花と
の思よ清かへわあわ絵れうしやうにあさ庭のあり
をりはくまれたる枝もつふまそ清きのいでわの
きとまりし見を春つて清うちやへ清とはなけれ
でおはくくしきやうならむハ人見あとかくし
なしとおかれはおひ妻りへし 思りんもこ清なき

思ふへけれハりくちハひ成け竹へ成をまつわめ小児
なまこきそふし竹へ至
まうおもくそうはのうゑまう消ぬへ黄風よたて
よふ春のあハ雪清き御ゆとよりくおきなきなわ
さかれわ乃雲小をめゐる人ハいてうくいおもをぬもれ
なをと先とまれでみぬやうよ成きらりして庭こ思ぬ
こと人のうへあらはさこちあまきなとそ思ひてゆえ
竹へけをでめとなりくそたくんやすくを思ひあし
思へとのこ残こえ思ひふハ空乃清方よこひあかりわ
竹ふ心ことにうちけさうし思へ成御 有様ゆま
見まちな世成なとハまして見あるのひおわやかるおもひ

此らんり御め見のとやうのあひだへ候
人々そいてや、見れ御前有様ひとつあらめてたけれ
なんさ候しきりにいかなんかしとうちまもりて
思ふもかきわ宮女にいと頼うなけるかさなきさ候
みて御志らひなさのきとくしくよけく
うけ給りしまま力ばかりはなまんもなくねはりなだ
はかとまて心とはらうちりみもなくおえのなわ
らとりなちなとこしたまいりもたくちらのおも
きらひきぬんもしてん座ひをうけくしきさ候し
給へ其流のみの心はかくしくすくよりあるかくの
清さんなとこうきう說法なくかしまれと世人思

ためまでかりしさはちある候めなよゆへしく志さきかさい
人には楽さきだわ給へ候をなとてかくおもひしうふかかし
よそ給ひりんさ候ていと清ん心うくめ給へ候見へこと
きてしをと思ふも不便くちかしけまでいふめく
うき見えまわ給たくやき給まして奈よくとなひ
きき給ひて御ゆゝへなと座もわかえ給ゆ候ていい
いわけなくうちのくまひ出てえまふぐみえ給
菩提心あらしまうはちゝてんをとわせましをとい
無用世んなさ候しくよ思ひならめてとお候も
かく候ときき入なあるこというときまれなわかわ
とりくようあぼういわわけまいのかめひい

いとあはれなりけりしかるにかくてかへりしとおもひけり
さしなるひめられきみまゐる人々は年ころなれよろしきも
君のうへの御はからひなきはおなしくつれ
なりしをおもひしたてゝわとおもふに一条北のと
はしたなきまも思しくおほえけるあくいふことしきは
こなたさりしのまゝなるをなれはかくおはしゆらんとゆく
しきまてあん院北のかたとい月のうちにみえしに
うけたまはりぬこれ院に其なる者をうちかくしとも思し
なれ宮の御すかいさうなわたりにはしくいつかに
きみやなとおもふわれすなくてともかくも
たゝ御心よりけてよそおしはへくうちひくゆめ

なを給はれと思ふうちはめぐしくおさなくおはしはに
を思ひしえいはわが君の上にも御そうさくことゝに
あはれおさなき人のこと捨まさなしよそうけたまはひ物
はゝんをはかなくおほしゆめしてうしはかへ
たつはへいる事をやあらむとて
うきよおほしきの世に残ることはかなき給はまよ
そちのかたなわけき屋こをうるさてあるはも
なこよましくやとあはれこそ思て其にはは
きうしく我もしこまはきさえ人々へとそはまのひ
小も女房しておはちをさし出させ給てまへのさまを
はいのへわれいつとなと申しくあれはされと

こしくしく西白河へ参わたるなりしをは
たくみをのへて
うきく世のうしろめたくいさわよくきたなし
と志のそけなれはまきそなとやうようほのめまし
女のさうさくりほうなうへて御遊にたま
なともいひとめてたまひを院法説してあまるも
まほしけなめるあわり いりけなくてみえ給
らんこといひとんまうしおほしいわとはとそ女院
東宮たちなとのりまてわの逢給ふも若おる事
なんおほうわく殿内侍のすむ乃きさいは故宮さいの乃
宮のおほしはし二条乃宮よりこえ給ひしあつんやの

法事を過ては此法事をなんかへかこうちたり
ミうともおほしたわく所は末より殿なんとおほし
たまとかく成きほひはたは志うちやうふんあはんぬく
しといきめ給て座しく仏の御前に参といふ
うせ給ふ六条の御としい気よありけ乃ことおほして
やかてまし法あたりかたましはとしう給も志うくいら
なりんわわふ対面あらむと一度あひみてそれより此、
りも参こえまおほしく乃くおほし わか所をうさうへん
り世のきこえてもよくるわ奸へ義方乃程ふいと
おほけなわし世のさはよなともおほしむし所
まさるよ法門ありはくりんのし給ふ巻所をかう乃と

なかにはなれて世中を思ひしれはすわならんはかひの
はかなきいよくゆりしをん詩をけまいらせましき
事とはおもりなりし大方のはとふらひりしと
はきて先なるさ後につゝよ覚えはわかのくしまする
つきはありひまつゝ見はいはわも時〳〵よ聞きてやまし
かりし者すわもこゝよなくうちくしとくのひそて
わするはけりひをみはふもな我思ひかさくそ着の
井鍋云の君にもとふもんふつきたりたとはこそよ
のはは人のせうとなはいはみのはは我にかなんをめし
ときそはこしくいはしへふのへ見そうくらひは
人はそなりて物うしに我ええまへ〳〵我たりなん

はるさわぬへくやさしなひりしていゑしくしのひて
其うむゆまいさやうのおわきも哀さ義男のほとよ
おかすはけなうれしの心へ義事なきはそこふもえ
人ふはもうしはりしとおのふようさゝにうしは
君はをなんとのはりんの君いそてや世中をおもひ
さるふはきても着よわほうきはうはをこうて随思ひ
はあはるとしうはのまてよ哀にあなしきはるを
さりきてゐなる着かさわをり望えんけるよ人ハ
もわまりぬやう有せんれとりんうらいゆる体のし
うちへは迄とうち歌まはほくな我文よおゆましき
よさせのを常に思いましへまわなかわし世なり

いま心うくハし給はぬよりもあらさりしと
さまうむき給ぬる御ためらし給ぬ事やうには
ほ達とおもふかしよりはるまいにきもけさ
座りよきさまよりわてたちよしわの名いまさかなり
とわりへし給へきすやとおほしおほしてけさの
なめもわを花のちる八山そてまうりて給女君ハ东乃
院よ出けり菩薩乃君の日は生侍るひてひきしく
成か給ふを出ふはりしさすの紀達りとうかいまさ
いもおかしくそうんひうなとけさ座のはわさらんも
むんな美我衆乃自り思ひてとなん思ひ侍る人
小もすくとなきつきしとゆかし給ていと心さまう給

けさうし給を例いさしかみえぬおもはなあや
しとみ給て思ひあはせ給ありもあまたと兵[宮]部の侍
さりのはハ何ありもいとすきぬるよしのやうには
おもひ給すこし座さほさんかうひてうしらぬ座うまて
おはす我の日ハきん殿へも渡ると給ひて侍あさうさき
かりし給ふまぬ出なあとよりんをへてくるし給まひ
もしてもつましき人民は思ふ人はうかあしる東民
昔あかえそや侍達ふ給ふ山そいそ給ふいはとのかさ
しそ侍きうさこゆかしたまふかくわすわおほします
たるよし侍てめかぬ世の悪ハおと給き給てあやしく
いかやうにゆかしふ給よう心もむはうかせへと給へし

昼まてあへしきこむよひとひんなうねらんとて
はなかちたり思ひめくらしていまた幸にとゆつひ
なとやえ給てたくらくみしに物うしまてもさらに
昔乃あはれ浅きんなといおもひなかり人なきと
わかなくやたまへはいたくなきなく升さわたし
給へるまされはよのなかけちのさはれうけれはほか
かきやんよおもろけなきぬ御ことはけなきはをも
すくなのこんのんうしの庵なかなかさけ見の
かきのひさしふれくまわてやんさうし比こわは
うためされいとりの昼のなあるたちともよはの物
年月比侍もわたもまのきれなくかへらるるん

なしひよかくたのしききはいやしうはしくこうとも
ますらふ思いたく文りまもりはうるをし比
こゑしくなと気にやえてさめくくと人めすくなき
宮のうちの有様おさもうけまり世うれとたかし
はしくるに思いちうあまりなかうねとまことり海
も給よなき昔ふかりわてかとふくしくしくはやき
給もひししきまたをうくて昼とひきうこうし給ふ
年月比中に海て上坂乃ききと見うさく
かけるなかへるこの女
海のこと来とあかさよ志水まてりわるたい
きやを給ひのことなとうけたなきやすも給へといひよしへ

哉をかしいはるもそれにつけわれたるいはさ床いらし
きるもあはれ世のならひは少思ひ出給ふまゝに
とゝたひの対面ハあハれもすへからわとおかし
よそるもともらはし序の有るあたれをさそまし
人乃としはハさ成くよ無事をおもひ夭わる
うきを見られくおかやをまくらのうりやまし
はく数もなくおかしあはめて心をゆるくもし給よ
逢と昔おほえする懐対面りき世のすもとを
うゝぬんちしてえんはつくともそあし給ひに哉
疎うくしくわのうなはのしくて一りうあらぬ
世乃はくまし哉も恙を思ひみつゝまて歌寄りち

まて給し給ひきなしにかしめうゆんすわも
光はらしく哀すそてはをゆくもいせくちおりくそ出
給ひん空もあしあさからをたくなりぬうしまもゝ
ちとりのふ忘もいやうらくのなわ花ハこれちわ
色て名残りはめ給ひ桶のあさ緑なる木立若葉ちの
志給し竹はの事あわりしと都かし出ると
月比積をよる給ひ程もそれおわ乃ことうさきはけ
はれよおかさ給中納言乃恙のえきわをするとそ
妻戸なしあけたるに立すへわ給ひての哀よいのふ
深うんきゐの給えありぬこ給うよ見ひにあうい
てうらのうきいたちえなるへ哀やゝまわあくいそ

うそ有おかし座らひさわ山き人よりわたりし出給
日の光にてなかりけるさまあひめもうし給へんきち
けるきさ夜のさよなく物思ひたえて見えし人々思ひ
なととめはらしく程へてもみまゐらせましてよき
つるなかれおかしけ中にはさはらさめてもかはるみ
まゐらし給ひさらむ帰し見えやつらん心もしらせて
きこえさせことにかくかき給ふもなかりけるを尼君やの
よるはよ人をはらし給ひようるぬ世にはおはす
ちくしきけるさんのうきそ座になりなと
思ひ出しの名残おほく給はぬらんは物語のとちめ
まはけりのこらわはるきまはししなわさなめると

御方を心ありえはうきはを給ましきらの人
あもいととかう給しせはくましけまいやうくさし
はうわゆく小ら給あはたくしくてらうれとよは
車さしよを心人くも思ひてさはらくれ紫の
人もしてこのはきかくまたる花一枝かゝきを給へ
まはらしも忘ぬ物をもちわけまに方をあけつ
へまやとの茂みいとにくくあかしまらひそよわ
ぬ給へ尓かれくもしう見まは女君もと夜入りいと
はまうしとさきなくくかりひみさまとれへ原小花の
うけたな我なはかしくて
かとあへらんまちも嫁さとの関なくてうけ志や

さしよこうわさ候の沙汰いと大屋かなる法ゆるまじきを
んなりしもゆるさぬうたにおもりしなりし関もわ乃
かくこそあらぬたゆたふやいとゞくらひをきて出
給ふ此かたも人よわこよなくかとめておもふ妙へ
まし御んさしなりつりはかまそやかたより法なる
らひ小はいりての名もすくなりつむいらしく思ひ
いわ給へる御ありさまの法まを給ひけて女君さ
まうわなりむとんえ妙へまとおほえつしくまて
あしておりは中くうちふりへなと出妙へらんよわ
も心うるしくなとすくさもんりれちたまへらんと
おかさ候まいあつまりまわりくまふりの義ちあらとへ

なりき世をうけてやまと給ひん此君の法うけたまはる
もうれへきなしとはいはしんのうちもえわ妙へまは
まかすはあらじかしとりはの子わはせ将面
なんおほせある候こちさ候ゆりてひとめかうの儀おほ
ましくもてうくしていま一ひとりうしひ
聞こえ給うちわらひてこそめりしらす儀なへ候御
はわさ候か昔をせよあらたまへくえん給ほど中ちう
なる君のためにて候しくとそさ候うす深きと給へ候
候えんのいとらうさけに見ゆ候ようらん座候りくぬ
済きしまひうきる候しはまたくあひらすかひさ候こと
なとしてあしへたまへ御消候へくもなかりし

ゆるへぬを思ひはよこかなかはに久しはこゝろなきとて
よろはにはこゝろとわかなはよなまずとゑのかし
かりはれぬめか志乃はすかもとこりゑわるわか
りもとこしらんやすしはしおりしまひ姫君はふかふとも
あひしうぬを御らしなくともろくのしは
きこえ久しくはりしうかとみえかくしきこかしは
うなきもましてうなくはしの成へ志ちおひ給こうふ
うほくし給ひてあるひくきにおもひ給へ給へわ
きわつかのはすいうちりへえ侍りて給ひはいと
御の有難けまいんやすくなしひますへはかのきは
きこ給にいとまちしくのこおかしかわなく給ふや

ましく志給ととんかもゆるし参こえ給りしはいと
わかなしとおかもめはうしまひさ御の御人ち
まうちの御み（きう）いとはえか給るはたとかいと中し
まうされもくおかせうんうしのうらしそ御すそ
給へ里排荒北おりしまはおとくのひんりしおもて
ありはすはしつうひたわあうしのはすとはは方よ
うひて出入給もあまたのま参はくせなわうし
あれはうんこなきふわゝかて対面し給はいて小
ひめ君（えや）みやも中の戸あけてきこえんとてよわも
さやうに思ひしつとはいてなまにははしまし給ふ
かく御おわりゆるなは心やすくなんはなへきと

おとゝは宮へ妙へはうちゑみて思ふやうなる御しる
うきらひにうちはおなまいとおきなかるよ物し給
めのみならしなやすくまへなし妙へうしとゆ侍し
はえ給宮よわらあらしの君にも侍しけるそまし
らんかるおほきは侍らしすまし〳〵ひ義侍らひて
おはすなたらひおし〳〵かるへくたまへるおとくは
宮の仕うるふわらわ給そ夕かきのにも春り侍る
人に湯浴をり對面きんとそいそきはつ〳〵てり
ちらつねやなしともまほし〳〵きなもにもあるをゆ侍
してうきらひ妙へんなといひとよ義人なわまさ
わかし〳〵とてはあそひまさる〳〵なもはゝなうらん

かんなとやさ給ふ侍りしうちうゐあらぬ何すとゝり
春こえんとおひらうふの給ふ人のけしへいひとは
よろひてよういおもし出め廻りて見えてなりて
かし給ひうとあまうふなし〳〵へやさ給はかうはり
くそ色し給へとお侍きはまるよ何んな義は有様を
えはゝいさまえんもとつゝしくあちさな色まとさ
の給ちんをんへらてもわいかしとおかになわくわ
菓子にはかくいそたちなとしたまふ物うしわけ
よわのみえの人やいはるへ春月の雅のもにまつ秋
さ夜をみえ寝すわか侍りわちうあるめなと思ひ
はゝけるまてうちなりめ給まなうひなとはるやも

そのはつる山ふくとも物おもりし義はちのこうく
ふるきさうハもつこまはおもりふ事おわきわかう
みはりつうおもりしつふく流れつわりて定女は北
春なとの流はわか海ともきうほくしうとおはすふ
うれとさまく見ちわりへふ佛めうほしふさ
年ふ後め万まりへ源人乃おかなりけあつむかいと
かくおら後ようるへきふもあうぬを万残たくひなく
こうちと見りふかわかくきすも也かしあふへまおり
たさかうろうし久まかくのひたるようひてある
座よよ明まめうしとをひあ波めまよたるさ浪しくの
加ほわもとわはほ免めて義はりわにみえりこう

よわこともしい海さわ眺自まわかふためはうしく
つきりめおまぬさ海乃志きまへ海をいうそかく
志もはわかんとおほもうちとけさわはる清手習残
秋の志てさにさし明ま竹へまと見はきりてひおりへ
しえたまふまなとのいとわさともよまとみえて
らうくしくうほうしかまうおりへ也
男りちうく遊や義ぬらん見るまゝみ春菜乃
山もうほろひふかわとあ海而よ免やくめりて
水ある乃春菜いきもういらぬと萩乃志さうう
氣さことなまなとうきうへほくすさひりことあり
まてんかるしき河氣さ乃志さふれなの流うる

まはゝみゆるをとりなくけちかまへるもみな縦ゝ
義よおかさるも秋ハいはかさふもはいと恨あわぬ
へけまはは尚侍ハよいとまわなくて出給ひぬる
いとあはれましきうといへしくおかしうんすふも
うちはさまゝわ黒家の御方を志ちのえ君よわも
御うちをれむまはましなまかたのことを給へま
いとうけくけよおとなひ侍さま給へるを思惟
うなし御気をわ給ひ抽須なといと侍もしく
宮うたゝしき給て中のとはしてゝまも対面し
妙へさいとおさなゝまうのこみえ妙へハん房にくそ
おとなしくちゝおやめおたる侍よ若の御すら

なをも給やの給ふ中納言のめのとゝいふ人出ておほし
あさうしそたつゝゝ心よりはしけなけまとわくのぬ
さ色よ義さ色さいはまとついてなくて侍わはゝさとて
まわいうとのしはあなとなと小も物して給てなこ
うるむりをれおと給よしなともか物し給りん
あんうれしうる八条なとの給へはたのりしき侍
うけとも御さ色くにをくれやとて給てんほうゝゝ
おりしまはめふをかゝ色侍ゆるし侍るめ達はまは
事なくなん相りふ給へくまさなゝ色を世き給ひし
うへの侍う給も毛もたくかくなん侍ん母さて心く
給ひはみいとけな義御有様をとをもうゝみまゝせ

なほいくうはかしうちゆもさなんたのしやすこそせ
なほしなどゆき切紫門こゆとくてけなかりしはさう
さこのはいりのてとものえ思ひはまと何するはさ
てもすはあらぬかなむくちおしかりかるこ座は
らうふ残とあひこあけりひまて宮ゆも此心よつまよ
なほへくをなどの事ひ丹あのはそうさ残さ成りの
座よのよ茂こえ折へい廿三ノ心はよいとわかくんよけぬる人
うれとおさあき御んちまはうちとけなほへまさそ
のちいつもりはあこかまひなとしておのし紫
あうひわさなとよ深きてこうとうるはゆえこありし
世上ノ評判シヱリ
なほ世界此人をわいあうかまうわ小おめるあたわの

うりいひはほりふ兎此なきははしめはりるこい
世のうへいりのふおかはるむはおおるくいぶ々此とよ
はのやうまはおはきしはうしいれとわかなんなゆき
いひくふをとすうしふりきさ御んさしかくてしも
咲ざ原まま有るをそまふつきてもまこ座すうるは
いふ人てあ原りかくゆくきなくさん字こありし
好へいふと残まそめやすくあんをく原練せ月よ
嘉のう人流の珠小さう野の流豊まて薬師
佛（ホトケ）経養じ奉りなりめさきさとはきちよ川さめ
またまへはさのひ座りよゆくおわし通てさる仏（ホトケ）経
などもちすれとくのへまこと乃祭思ひやくなよ勝（ゾウ）

王経金剛般若寿命経なといとゆたけなはに新生ある
上達部いとおほく参り給へりけりさま面白く
国下鎮護ノ三部経ト云
いりむうさなく鉦鼓のうけわたりの人乃聲よわ
りめてみえなりけりさへいきみひおはしまる
たまふなるへし霜のまへわかれ聖けしのまゝにる
事なりけり行かりふをとぎけくひのたかわみは後やう
我もしくむ御らくいのめしもきこえをたまふ
廿三日を法華（トシミヨウトヨミシ）八講乃日にて此院（六条ノ院）はかくはな也なく
はとひまいらせ給ふうちに家（紫ノ上）はわかくしの魚とおほせ
二条院にてうせ給ひ宮（中）まうけいせさせ給ひはさうらうくを
りめ大かたの事ゆゝしくれこなさりめく

君所に残法方々もちほへつさう此わをはしつるみかん
はうきうまさ聖路香盧ともいへ人の房ゝよりまうさ給ひを
りくへ那そ殿上人諸大夫院司しも人まて乃まうけを
いとめつらしくきはきおへわたきん殿乃たちふちいてを
例のきはらひて座てんの帽子さてつわおこその
あれはまふはうれはくゑ十二たてゝ衣冠はよう（青貝）
帰しふさと成寺と例のこと室のあやの方のおほひとも
うはりしくみてわかてうものんはあるはなるに
おまへよりまい物のはくゑ中さはうものちろ乃すう
これおほひしたゝかきさしは香盧いちんのけうく
こりきりの香炉の枝にゐたる心かげんなと深景賓此
羽衣ノ姫君 初音ノ君ト

はあはかりますてありし此は方乃世はきかんふゆへ
ふかくんしとなりし後の清原四條は式部に定
あんせきを放ち給ひしを持うして例の四季乃發
なまめとめはりしまかきんすい徽なとめ屏風西白
しゆのかんよみんて書花乃みはしかさよ給ひ
たてゝ御てうとくもまいのうなわ火ふこの日
さしふよきまで左右の大臣計部に意をりしめあまわて
つまゝくはましておゝひとなし萬歳乃
さうにふ人此ひとりまうちてよしむんしよん
まきいふ十ぐ後きのうしひは四十はかりえてたてたわ
ひはしの内もろわりふ人まいはまんさいらく

わうきやうなれは叢て白髪ふゝはかとよのあま乃らん
志歴うしてちゑうむのまひ出たるかと於つほの（ナツリノ二名）
あなまめぬまひ乃さ成なまめいまひりは休ほとり雅
中納言忠親は悟わてひわかやとかのうふまひて
祝義乃うけにへあるゐ歌はうれけりわわかさ人く
おれしたわいますへの朱雀院此り帝の青海波乃
ゆへしうまし夕部思ひ出給人ゝい權中納言忠親は
乃まつさおとろはちはしき給へりゝ御世ゝ乃たかえ
有様かゝるちようゐなとゝおさくおとろはぬりさ
くるゐい歴てすゝみてさへうなと我乃かとをも
かうへてな殊さ給へ義すて昔よわかくたちはゝた

さは侍なりし人なりきとめでたく思ふあるまし乃
院も叢小深く成しく荒し出らるゝまゝ北の対
には釈迦いわて来人とも成りわ小乃殿ホ乃
別当とも人くひ井て続く乃かくひはりまわて
ひとりはとわてはぶくたまふよきさ物とも哉
忘れくりはきて山きハよわ池のはゝ見ゆる鐘の
ようめも千年をりまてはそふ鶴の毛衣ふれりひ
成りへゝ法ありひもしまわて又いとおり候
しけこゝもはまわうとくのへさせ給ふ成
朱雀院とわわつわまいま法ひいきん肉よわおりわ
給へ成さうの法ことなとられ昔都侍えたる物乃様

ともよそ兇はらしくゐひあはせ給へ成り何乃
おわ小もむすゐ方乃はゝはわさ成うちわすわ京む
あかしいそて成宿へ道乃宅おりをまうはかゝ成
は賀なると我よりけ見はかう成はるまし乃何す
み法をてうハこ給さしをともみえまわりんとあうれ
くちおしきのこおりひ出やさ給うちわめ故宮乃
おはしまきぬすをなまでのまもりへなくさう
さうしくおほさるゝよ此院の法事をしる例の給
みはまれりしこまりを法くしてもえ見をまうぬを
たとせありわりぬんちし給もことしはこみ御
契りあとつきて見泪きなとも出成へくおほし

はきそくまと安守はまうひあつむうすさうに
せうを始ましくなんせいあひやう事あひくふ
おぬまふくちおしくおありしとまわぬさりけの廿日
家の経に中宮はそうを給てとし此御覧せ
御いのりにあらう乃京の七大寺には補陀ぬの四子
うん此ちうの南都乃四十寺小きぬ四百匹をわかちて
きうを給せ難きはたまく見をおありしたわなすく何
すすは法をそうふの寺はんさしをもほうりし法
読せうを給まんとそちく宮うく法恩所此おもせ
ましはためれんさしをもとわうんおかれけりうく
ほなうちうりおかやきかもゆきくうんさうをたまうへい

すすはおほくとしめさせ給ひつ四十九賀せうりに
事はさきさく御きて侍る小も御わの紫ひさうしき
なあしなんほくなうわら所を此度は南都よれの
寺せうとめはきを給てまたとにのちありうむ事を
かうんさうをたまへとこのわけまとおかやきさ次まて
南都いとりのめしをあんおわら所宮此おりしまは
まち此しん殿にはしほらひなとしてさきくふ
ことにあいつうは上達部の禄なと大きやうりなは
らくてみとたちまはちとに女乃さうぞく非家誠の
四位まうちきんたちおとたくの殿上人小は志法寺
ほうなうの一まさまうしさうしなとまそ次くにたまうふ

さうらくはなくきすゝをはくして名たゝ来おひは（石ノ帯し）
そうしなと夜お坊乃は方さ波まんしはさりわ菓わ
ふ春もまう袁ふなん小春む世の一條乃龍と名お春
はいかん家はとひまい春御賀りなんおにの（めや）者
物語ともも抱えさ森たるをしよ事小は可うん
はくるさめまでとめとう春さくてこち（ふゐ）漂なり
らひのうともいえうらんあん侍ゝぬやうちゆれ
おかしうめてしゝうせをもきまやハとて中納言（メキリ）
まうつききをはひて久春をはの右大臣の家まひして（京亭ニ出ス）
志てなく久ふをこれ中納言小法賀れ雅をくひ（なを）
春んとれかりめして織（イキリタ右大臣ニナサセ玉フし）はなきをか法院もよひ

ゆかしけれ給物かゝいとかく侍りわまは院をなん
めちりやきんちしかるとひくし中納言とこ乃（花山ノ帝）
まちよ清志はらひまうけ給てかく給へたるやうに
志なし給へまでとくふは家をかとゝよきしなん（かとゝ中）
まさりて所ゝ乃蔵家とも蔵法ゝさ殿舎院より（金銀珠玉錦ノ類ヲ納ル人寛ノ）
はうりまはしきを給へまとんこゝきこ家とおかや急さ波
めて頭中将宣旨義ひそてみこたちよ人右大乃おとゝ
大納言ふさわ丹納言之人宰相人成上人は例れ
内春宮院のこわすく家し御まし法てうとせ家とは
御侍おおとゝくりしまで法うまはしきを給へわ
くふは侍るあわてわかれ後りわ給へ里院もいと（源中）

うしろくおもほすやしらてはさふはおほぬすゝめの
侍座よむかへておもしろの侍座あわれとさきより
もみしくしくふと里そこみれおもとうらはつかの
しうとくとにみえ給へ御おもしの院ハ称以と
わつき源氏乃君ふ太くしなは屏風四帖ありうちれ
御手（ハ手ならひ）し世給へ添りし乃あやのうすゞみ（うすゞみに）ん小きさ
色のさまなとなふ給ふなんやいおもしろき書院の
侍くわゐなとうわもこれは屏風の色見ほまの（うく
座くはまはぬもなよりはおもひやしさへめてたく
なんあわれ之屏風畫物これは侍し殿義もみ書物なと
差人形よら給りわ給へるま犬打（タキリ）乃はい義ほひもいと

いつめしく成給ひりそれいうちらんてくふ乃琳法
いとこゝとなわ侍る四十之左右なる侍のさ六條院の
家人とうんすわはかくにひ義とくのゐる嶺日くれ
そそぬまくの万葉和歌集などいふ葉氣もりわ
まゐてたとくのわふわ給へふよめはくしくもて
え御手給へふ侍あうひにえふ人う給も以まし給へさゝ
ひとき御乃芸都に宮何ひかも世ようさき給の
上きのおはしていとになしおまへよ我むの佛
こと御とく和漢ひふ給年はうひ給ひ小督添侍
みそれきてなしまやいとゆうすゝ見よおゐさ候
まはきんわ侍まおさくかくし給ひ侍いゝし　茂

語ともいへる者の清物語ともなといてきたりしゆきのたき
うら御帰なりしひよりはうさ小清遣てもききてえ
かよひ竹へ花清むかしひなとんちく覚え語て問(オイ)えき
あまりこたひ年わて物れ西白さもとうこほわなく清
えひ参義ともえやくめたまりは清をくわまれ入り
すくまたる和奴一これみ語あま笛うへて是うん
乃まきひとよ語ひにうつ乃かんせこく乃さう乃は
なといまて清東りとひて(キチカこ)まれ語ふ清むまとも
むうんとわて出れ清りきともこ後乃かくしてのく
志ほ六急ふの宿人乃語くせ大(メキリ)ね竹ふ御心とうき
語ていうめしき事ともいはたひとくめ竹へまと

(中細)近衛家一院御宮はなくれ清ゆ年かいはくしきさ
語いひきうはみえよするうなまいおうふおわ
まはめてたくなんわれ久ふ大ねめたく一ところ
おはすふをさうくしくいんあきんちきしうむ
はまこの人はほくれ覚しあとよ人うつもありつる
なきやうりおもし語かものゝはす小方れ伊勢の
宮は前との服ふのくいとみうれし語久ん語のは
すくせともりわはおみえさふなんはまくなわ
久ふうれ日の御さうくともなとこまされうん
なんし語ひ久ふ様とも大うさ乃うをそ三条の
(雲井ノ)小方といふうま給めわし物わしよ清遣たる御

いとあはれうちくの御乃きよもこゝろさりは
たくよう此ゆすりのこゝろかはるを御事あり
はきそうハかゝるも此くしきりにまよひ
はえましとおもふえたるを大将は君乃はゆかれよ
いかゝまくかきまへらは違はへ皇宰(源四十一)すへからぬきさ(川石枕居)
つかはし清うさちう川幾はぬるによりて正月朔日よりは
こはほうふかんありせうをはふるゝ社ゝ乃は新るゝ
いこ数も志うこはむしゝ乃君中にしてを見はへ
てうふ京は都とのるなといとおほはしたる越か
おもし志見んは院をあれのうへなとのさは事多さ
成りぬえくちおし　それうくたききさ抱りしをいく

おほさはさしよまうるいとおそろしのなる清なとよいつゝ(ヨハキ)
おほきんせりとてお乃りさはくありこ度ちるゝ
すわおやしくは気色りわてなや見はふ清ゝ給
ともさりく座へ陰陽師(おんみやう)しもし所をうへてはく
しみ給へくやはまいハおもさしたまれたるんい
おほ院のおしとて此おりしの御まち乃中よ此
妻ふわすしまわ給ゝさなゝそたくおかきなるたい
ふさはらうともなんめくわてはわ御所には御修法の
ぶんひまなくぬりそいかし験(修験)ざともはらひて
おふさるゝえ君こ此間ありけのすくきかたへ参
わきなあまへいゝしきんをつゝ給ぬおかた尼まも

とハおもひなからつき人まてうちわらひけりこゝのほかに
さをみえたてまつるハ夢比んもしてありしことを思わ
ちかつけ給ひまゐらせしにはかなきもすゝろにさふ
らひつる人へかゝる者の子なとまかりもやすらひしまろを
なきさわたりやすらひにまかりならひよえこえへんハ家の
てはいと添うちよ小家めすこゝろさきあすそわかなさき
出侍りけるを老ね物つりするいあやしくむほう
まゐり人かれとうち成もわなしとあらぬ人おわせ
りかゝたりのさてまゐなしなはほうしませてか
なへ里むまれなひしかとの事ともし乃気のき
浦にたちましはりけるぞとハいとそ京へ

のりわたしにこれもくんだまとりしてとハほ
ありけりの歌をかきつけはわけると歌しきとわり
志乃かくひまこそけ給へ御すくせ比いとしく
うれしき事とおほしくとあけ名々けてなるわか御
者の子をかくさうせさうしはなれ侍りなく
ても過ぬへうわたりわたらせてあさきほんのうち
みれまうみをなをうけりるとていみしう御へまゐらせ
ふハあしさわきゐをまゐらせ座の上乃御もてなしにて
おこまそ人の思へふさはなともりさはまはあらぬ
ありけり女なれハ女義物よ思ひてこう宮ほかへ乃
ひとゐもかさ人乃人てなにハ思ひけちこよなきに給

なこるまなハ志ほき世人ハ志こゝのひ出るやうにも
きはらむりしなとおもひ知をそぬまく君なれはと
まわうくすらし覚えくるまかはちかきしかなうう
むまれ給ひん雑なとなれはさか世ハなまたる境にて
みかうも志わたまのハさまくわいとほのかにおほしぬ
竹ゝるきはまりハわ座もおほつかなく（オホツカナキ）しつわきるす
なわやはの道乃ちは仙人れ世ゆも去ぬ座うまて
ぬたまるをきて給も心をかしくなとかくくに
思ひみるまぬいと物をかなめておほけなる清
よるゝ気給ひて日中の清う絶まさるくつれたまわ気
清とひ物さはりしくのしさかまおほまへにうと人も

さらつりほ尼君ならそていしちかくほうふつの給ほな
ゑくるしやゑしうほ本りひふるまきてちうかふ
らひ給をめ風ふとはハゆりしくそなの清らうかこ
るひ乃ひまもあらむよをすしなとやうれさ座しそ
いとさうのまずき竹人まやなとな座おうはゆさく
おほひ竹人まのしめきさ（紋）してかるまふといおわかゆ
めまちとももうしく小えてもおかくしうわはま（庵）
あことうるとふきそぬつわさなはいとさいふきるわ
小ものはうはのし六十あまり六乃仰とたかわはまゆうう
いとうつうま小あそぬるき座しにてめは座ゝのふ
な義りまたふ座きしまのおやしく昔思ひ出たるゝ座

なまはむまうちつふまそこあれのひゃま車とらまや
侍はらむちくらのよれほの乃やうなるひのおかえ
ともふとわまをはくあやしき着けすせといそ
まうてなはらむりや夢の心ちしてしは法とうち
ほく涙んてゆんまわ妙へていとあ成めしおきすゆ
すそまゐすわといふく志津まわ物おかしさうはま
りえし衣りの手けおわし衣りたりてしれあみよ
いとおもしきすともやすく衣ておかしみさは
まやしそうはあわと御一佐をきすぬ衣りん世あり
発こしもしてきんともうあもへくちおしくおもし
ほうへ春かはおし見とめとく物しきこ旅とわ

志衣らん比おかゆ御りうちそてへ海よてあるかは
まさ衣なとちらのくまのあひあしこまてりかをたかと
いとんくはしけは思ひはてきてえ衣ふはま志をいと
めてたりまはをしくときはまさくかの涙いえとく
めんのかいゐそてくちはふなといえあるしくひ涙
うれたまおりましけわらうち志くれてひかんぬ
うわはなあてらいさとめくりもまとてもいまは
大尼
老乃波のひかは補よ志出て志かたなてはまのと
旅のとものめん着け世かもずやうあは小は人いはと
ゆふさまてなん侍きはと発こはけ秋なはうのみり
明石
塩たれくはまをかんちけ志る庵まそてたつきも

見りやうは是皆やうを法方もえ思ひ給はそれ涙給ぬ
世を捨てはつしの浦すむ人も心の底こそ
ある巻しもきしなと書くえまきすり竹ふかくん
暁の事も萎のなめり思ほしむらまぬとくち
おしくもあはれ徒なることおかしやまひの十余日の
程とふたいしうふむまれ給ぬりまてはおと給く
しくおりしきはきしうきいさくなやみ給ふも
なくておとこ君こふさんへおはしまさは限なくおほし
さ候そおとくも清心おもちぬ給ぬこなさいかくまた
乃方まそたくけちつきて程なるよいつかめしな清しふ
座にひなとのうち志きわかしまうおしき有様

かまうひおほかうしと庭の乃たあまはみえつまたゆう
きし給みまきやういいはつ給なんとは屋の
うんもわらは給へつまた志給き清きうくしえ給て人の
御めきていけの宮をさといふまそぬ給へにはまいると
おほしめはいしふるほ事志わ給りは人の乃色に
てもえかひ給りいはいふめほうかうほふしと
思ひ定む給ひおほしすれははに於給をそれは
いふ義ともわ給へはまめとれにおそきえんたくまう
まわて御ゆとみくわはうひなこ於つかうまつりわ
給も宮家乃宮有なる内侍乃すきうはかうまつるに御
むうんゆまおわすち於へ落もいてむ衰ようはくの

すもかのさらになりすてうけるかなしはいと
知しめしましをあさましくかなしくいよいよかなし
歎きにもの給ふひとつの御事と見奉るに此
かとの嶺しきなどもまのあたりにいとさう
なは座六日（ムユカ）といふにまゐりのおとしよわなる給ぬ
七日の釈迦佛よりもはうふやしなひれことゝのおも
沙羅林のかく世なりてれはしまた佛なりける
まや夫人昨日は伝無宣旨て迎はゆるなかなか小
つうらまはさ縁の経ぬなと又中宮此はするわも
おかやをすなるたちまさわりのめしきさを給
けむしくれみこたち大臣のあこそ此はのいとあれ

まて我もくときこゆるをきくしてはゝうまはわ給
（添）おとこの君もこの御事とも例此やうにも
こしうをきゝえて世よなくひきちらかしとよ
内にもなきめのしくらなかなるやひのまひ
はさふへまかしをめもとましく殿よきわたらしの
君もわか宮を御なくいさ美葉わ給て大将（タヤウ）のあまう
まうけたゞ今ときて見をぬようにめしまよめく
らうゝ美人をえん葉わたる心とうつくしみきこえ
給ふは（羽ヒ）ことりかなわ座日こそりも此殿ひき此かる
やうりおもひたまふはめれとおもとんさうなゝい
とかんありめさてさ嬉しふ中すにさまんすくれたる

かなわをえれてはかうまけらきを修ふ法のこゝろはん
をきそれらうくさつくけたかくおかやうのなる独れ
さらへきかさまはひくしてうくらうふかもうけ
りうぬなゝゝをかめぬひとなしかれのうへハまか
おう見とえゝゝかりし修てさりうわゆるしなくおかり
たわしうとゝハ定乃法とくはいとも侍ましく
座んことなくおかり滅よたわちこゝう侍らし見し
修ふ法心まてはまうはなと法ま法うう法くわうく
うわおはほるもいとりすくしゆ菩薩法う
法ぶまてすくし修ゝのゝこ代乃ほま若ハまうの定を
えこ法のとうふ見まうぬなんおうほ覚てくらゆく

ゆんまわうめて悪我こゆらゆう余もえさゆましう
めわはおうしふもうら御うはらへきて
さらひしまんちまもいとこおしくおおてかれ以まゝ
あん世世乃さうひとこ法座法くゆむを行るハ義と
弟子ともよらひて世家をハるよなしておたわの
田なと座うの寄えのあうる寺乃う小志通てこれ
国のおくの郡ゝの人もかよひようくふり義山おらを
としこ法所志め事なううおしこみこもわなん
のちまるひとまはみえ志うふへ義りもおうほと
思ひてたくすこし覚法の義事おりけはせハ以ま
まてなうろへくらをとえさわ比丘仏神をたのみ

すてみんすほとひ久しからのちのきさとしこ後小ら歳
ては家小ことなるてのなくてひとめあよりしまう
さわつまきまよりわくくさし給人きうわに法きそなん
一くさわよてもおまの志よさ成へつまと将ぶ郎此事も
ますひきる思ふふ成く世のともちめ小つきさきそ法
からにまま迷妙へ里こ此とし法きれなし無用乃
うちふめくるひ待つまきとなまうハうくなりつ方を
うへさ成やうり思妙へおしはくさせるすな義
依え参こうけたまりうはの所文光給へ成そめ此
いとまい楽わて念仏もけたいすふやうり庫くあうて
なんはきうちくともまらぬをはてにこけ給いまき

見若ハまき念小系給ておとこ念むまれ妙へふよしを
なんふかく悦中待まゆへいこ法りうかく法さな義
山ふし此方よ也更よこ此よ此さかへをおりふかも
待うす迎よし方の年ははんききふく六時乃法とめ
ふもたく御ゑとこ後ようけて蓮の上乃露後の
孫のひなへさし番てあむもんしまつし我おも也
むまれ給りんとをしそ此としの二月乃十夜乃参よ
こしやうかんはりうすこ此山と右のまふさしけたわ
山の左右よわ月日乃光さやうふさし出て世を
てうすなはうつハ山のしも乃うけにかくれてう此
光ふあるこれ山なれひ後お海ようのへゆきてちい

さきさ毎に乃わさく西の方にむかひてくわんねん
侍し夢覚て後はわすれかたきぬ事ありたのむ所ハ
いそ来なから何事ありと聞てよみさるいのめしき
事なれ侍いてんゆんれうちに思ひ侍しを我のは
まわりつまれ給すしこえさうれ方乃ふかくをえ侍し
ふもまて関数の人を殺法中にも夢を信すへき
すおほく侍しうふひやしきふとし後のうちにも
くうしきなくおりひいてはかまわしうとちう
昼ちぬ身に思ひ侍へしまてなんあり候えをも
むかし侍りしみちの國にすつりよ侍て老け波
さるまほりんらしとおりひとちめて此浦よとしは

侍し雑も君をたのむ事よ思やさ侍しきな
なんのとりにおほくの所をふそ侍しきうへわ
中たひつうに思ひの事時よめひ給ふ身の君なれ
そくと楽給て孫りひやちおりん世に位君の法を
りめをふし中竹へさうよ何事哉よけ数侍らん
このひとりの思ひちゝさき世よりふひ侍ぬまいそる
うかうし乃方十方往乃國へふそたる九品れうへの
乃そんうさうひなく城侍ぬまむそいたくむうふ法
蓮な侍るほとうれ夕まそえ菓誠よ義やまれ来
まそつとめ侍らんとそてなんまうわりわめる
ひう里いてん暁ちかく城にくわんつうしまれ

ゆめのやうなる心ちすなるとて月日のすぎゆくは哀なるらん明日も 中二十三
さりともあらしとおもひしかいよいよ人のなきあと
なにはの若菜もなきやうなる事にておもひたちて我身は変化乃
ものゝ覚えおもひなくして老法師のさきのよの功徳を
つくりける人世よりたえずはかなく侍るをも世を志き
たてまつるあまたのひ侍る所にたまいたらは侍ななはれまうる
将門は侍ればさはのみのきゝけりいはれてよく
あひきんとをおもはせてその社にそれは物あたる 出家
破戒ともをおかきぬるちんのふることけりにけむし
こゝめてなかれ侍るはまさにみおれさとくにのかには
たゞこの月の十四日よなん草乃いほは成りわ 二十 廿四日ヲヨシ

なかまでふるき山よりの侍めくるりひなき力をたく成
おかりみかもさし侍なんそこかは給思ほし座り 施
なる御世我まち出給へわきうりなる所にてまうさ
将門はあわなんとのことおわ尾張世にふるをみそのの
はりひの大徳とくへは世にても出給て三日といふる
なん後たんたるまにようつろひ給のしあきよし座
もみれ情をくわ小ふれしまでいさひひしうと
みなのへし給て侍一人わかたに人なん情候り
さふるるを給とそとよを世を給しおわをうれ
しきとものお思ふるまへしとの侍うわ
としはなにひのひまくよすわかなりりぬ

なかしはしきん此師こしひたとわすきはて
かいちらへはてゝ備り給ふわか中志はてゝなん御
堂に籠入しはしさら然も此ともしおかくえ
まわりて手物わ我なんは弟子せ六十余人なんさ
しおは御さぬきひきはにつきて見ふ聞志はて
なきしのこゝをなん参此はまうとてそくわすわ
さまへふとハとてうきこもわさはりなる山の雲
かすゝふましをはてむなしき御終よとまわて
すなしひ思ふ人くなんおかく行るなと此大ときも
わくハすて家すわかさこをかはし人の老法師よ
なわてとまれふゆいと見よ心ほうしと思へを比叡の

法弟子のさうしおひしをすゝ誠る此岸をハたと
たとしうしは我ゝやみえたりうは薪はよなはよ此
まとひえぬかくをくはともして尼君此の前しと
思ひ給へはとはかし法うきたのなくの我とくふ
おはすふとうはきうきなんおはを時けれ六
思ひてわうわ外へをとくしく力をもてかして
おか給けなとてはかはひあひ見たまふ事もうき
よとなるをなんとまておかはのあけまいうち
さのひて物しほへはりいといとしくうわしき
なはきしおすて外へを出ちうくとわらきそての
女をみ外ふよけよきをとめん万物なうるをくはまうき

乃人もなゝとものめとしくむましき事乃まゐり者なし
よろつの事思出悪しとおもひわつらふ心には
あひ見て過なそめるよろつたらと見給ふにいとゝしく
いふりひなしと涙をえせきとめはこの夢かくる
をのりてゆくさきたのもしくさふらはひかんまて我
身をさしもあはれましき世に小あくかれし給ふと
宇治おもひたてはわれ事をかくまゐりの我か家に
たのことをうけてん心うく物思給ふまなわたとりわひしく
おもひあはせたまふ御ありさまをひさしくたちあらひて
君の御ことくるまにおわしくなをもたくしき事をも
身になりてはてなしひなく思ひはなはされよろしかりし世

思ひもすくまそこの侍れ数ならぬすかゝりてもなから
庵に都をすてゝおもしこゝに志津みぬへし哉たちにけ世
人の心のたつひたるすくせのかもはつるゝ事と思ひ侍し
うとはりは世よりはなまよ庵たてはへ来侍の契
とい思うけれおなし蓮にすむへき世乃たのみを
中十三
さへうきてとし月をすくしきそ儀にうく覚えぬは
すいてきそうむさし世よたちの心へりそ侍るうひ
わかは事をみきわ悦ふも此かくりしさは
おほはかなくかなしき事みちうひてたゝぬを
つみよの行いふ侍なりし世をおもふなんに
かしを覚え侍る世よへし時ゝゝ人めくぬんりへに

また世をすてひかゆるやうなれしもせわの春とも
たのみあらひてそのくいまうなくちまわなさえ
けさをかくらえりいとふかくうたのミ待しゐ
いつかなさはよくえてにちまさかとなりうかくて別
ぬらんすさいひはくそていと哀ゆうちひかえ給は
かさもいえしく泣て人よすくまんゆくはきのうも
おうえはやうはあらぬ才みれ何事もけさやうに
うひおはへまよふもおうぬ給のう何よ程なる有様に
おれはうなくて屋ミなんのえようくちおしけさ
よ孫僕のうさはへ美人の情ためとあう覚え待れ
さそたえこもわ給なれ世事もさうさめな義に屋りて

春く給なはうひなくなんとて哀もすのう思なる
うりとも残いひはつおうし給ひ白もおとくの君此
おなさよはわ心え墨給ひてしを極りひかくれ
ゑらんもまうくまきやう激屋う方ひと何いなよ
まうわも思ひはうわ侍うはかくそひ給ふ情さあ
なとのいとおしきよふむんふまうきせて方をもて
あしゆくうるへきとそ暁よ帰りわう給ぬ宮ハ
いつのおりしまはいうてりえ事はへ美しても春美
ぬとみきわ給てん女御の君もいとほそれしふ世
おりし出はしやさこさせ給めそ院もうとのついそよ
うし世手おりふ屋うなうはゆしきうゆこと

あまたゝびはまさなきまで猶まてなるへ給いなんとの給っ
めわきいりのふかゝす事ゐりわゝむとのさまへえ
みうちゑゝていそやされハおうさ侍くた免し
なまめかしくをよおうねれとそよ給うふこのぶたこハ
もこをそてまうの御わ給ぬ宮すわとくまいり給へ奏
よしのくおまいかくれほしたるこゝろうりわ[?]わ
めはしきことさへそひて明りふんゝとなくわ[?]
さふらんと紫の上との給てまう宮をうひて案うを
奉るむ乃かわう給はうひし給ふ御息所[?]れいと
ま乃ことまにぬふこうわ給て系つ内はいそて[?]
まりしあうまかうしきおりしたゞほとなれ御前に

さるべき給し事をきこえまはすこしおも
やせほそりそいみしくなやめりし御さまし
給へ見たくたあらひのうこくおはす給たとはくるひ
給てありハなどは方なとハんなるしうわせみえ給を
おとしきこやうりおもやをそてみえ奉り給りんも
中には猶なるへまかきなわなとの給ふたいの
うへなとのわうわ給めるタつりきこゆ座に給るに
はうこおまへよ案わ給てこれふたこ参りこきこゆるを
給思ふさ侍にかなひそてさを給ふまてむとわのく
して通て侍へけまとゝ世中さうさめかゝけまほうし給
めるさるなんかの事なも御心とおもりうはまへ

さらむことゝもかくもあるへく侍るなれは出しもし
とはのとちめを侍る給ひきこえ侍へ義あるも侍りては
なけかしくいう世に侍る世にあらんとおほしなきころも
やすきさまをはくへく侍るをあると思ひ侍りても心ほそく
あやしき給はなまめことまた侍らんさまよう見え侍る所文は
ちかむかし侍るしあまとありなりをはなれてあなかしこはちかふ
へおもんかわにほころんしてかうちのかたとも
きたる物かんかときゝ人にはあまもかきをはなれうよりかと
かんあまりをきつまをもみはかるも世をなけき侍ならんと
思ふかまへなかゆけはよ給ふ心のとくの心もゆるされし
凡石ノ上 凡石ノ姫君ノ見えし
侍しは厳のうへの侍る給ふにみ思はきこえさせ

捨ないとみに厳を捨去所に出けるは気色を見侍るまゝは
身のはこよなく成さりてあるきは世にもあるなん
とり思侍るれとよわ御身のうひ出てさきんとり
つきてもはくまて失身みえ捨よ侍るまゝゆはわ哀こえ
うあ侍りしをいとかうし去も捨し たまりしと
なんとしはいな我よみえつるよおりに所へわかわ侍
はるとえきしのこりさきうし説屋はく思ひなわ
まそ侍わなからいとおかくきこえ捨姫君をきてきて
おりはのくもほかしうちへてさかまへかもつるよ
うちとけ然る厳し捨てもわなく捨はくこゝ志捨へ侍侍
さ厳なわこみかこの玄蕃いとうしそこりくかくけ

ゆるさ所をかんちのきいかんまて辛へたりけ達を
きゝしは侍ゞ一所五六枚よ侍らうふうらふいと
ふうくまえんさるよりきはへ侍るとおもひて侍
ひとむらみ乃座うくぬまゆく侍らはめあてり
左所めり院（源氏）をしめ（廿三ノ宮）の侍方よおもひ乃所を中乃侍
さうしよわふとりさま給へまとえしもひき申く
さて御本丁をすゝしひまよきせてこ侍るをりさ
かくま給へまとりの宮えおと殿ま給へまや内のまかも
悲しきりさなかくかとやすゝはへは宮すとこ給ふ
いとへもやきはり女は侍りこゝ垂よかすきこと
はつと券ことはいとこあやしやわ手さにゝ孔宮よ

らうし（領じ）まわてふところをさゝりたるにこそまて
あはれひはゝ人座わかされきぬもみえにぬれりして
ぬ哉うへかもちなるめはりはくしくなとこりくわすし
まわはこなくこりわすわてよう見まわたまへめと
のはへはいとうとて（明石ノ上ノ詞）思ふ（此中）ぐ所な哉侍すうちに女に（人ノ思フホドヲシラズ）
おはし所さんたまはなさりてみまわはりんあう
もくねらめまして男ハかきわなりとゆえさ侍まど（スム）
ふ座ひくおかえはふをこはま達ふてもおやうり
庵たてかましき寺となさのしうわやえさをは
うときてえはうちわくひて侍中ともよきのせて
見まふちきゝ遊へ義なゝ里に滝てくいまハこ達も

これもさしまかちさうし庭なとの竹ふしよりおきな
けしきのほハよやうなりひよくれてほしあくひひ
おとし給ふめわりしとてほま丁をひ義座わ給へ
またありやの庭りよわかしまていと幾よけ小き侍
まほのしけなるさ宿しせ物し給あわ侍るさも
またひよくさむもはまあしかれハてはは侍るな
かうれかさうふかきさんはるむきさう人のなりうさ
ちやそかんしこあたるんちうすまとの給へは
かなうさてや川まのめあしもなわり人をも給めかし
はんなうひよやまうぬやうなほはすさひさとくも
こより時こいてくれとてほの思こ竹へまと物裳なれ

かかる住まひしもとくもまうるけしきハあやししとうちらう
小義給へるさ宿なれハ見侍りしくそのおりし乃
君座よわまおひてねし侍朝るきの異数みまつ
殿なと乃侍ら給を御まつ給ふもまうきをたまるハ
あわあるうはらんしをくへきやとて侍るとたく
とハついてなくてなまよハあきさせ給まんかん
給よ我ま先なあるハまよはわさ宿うしかうおり
いうふせをさひましてすすな給ふさかん原なかくて
こうらのとし侍侍とまるつかんもさなまうむうし
世中ふよしはわさうしよりさくの人とて人る
かもうの世ありさかん上原なと乃まこる宿ふうまや

おもむけることよりこちかはまいとあまあわわかはく
さよはさわかれやさもいたわふかくさひすふ若き
あわしき人此有様の所のしまづから世をなまかく
小もあらぬ身此うし思ふされんハ見ぶあらぬ世り
かよひすみまし所とおもえし〳〵かまして世ハん
きよしきかよしもなく思ひたるかれよふもん成屋よ
やは我为なかるハ思ひていとわはまほしきよう小
の孫とハうの侍し所成もすてゝるの書きこえぬ
山ふとなん定侍るとも由ゆまはさふたう此ゆいふん
なくてあきうえしはあよそうし孫や尾者りの小思
給らんなやこのやまわもみさなきあの数くことい小

こ我が子へけまとてうち添まこ孫へつまとこし姫の
法もわか世中のはわはまとよりくれりひきわゆく
まゝにあやしく思しく思ひ出るゝ人のことあわ
さ成なまはふかきちまわのなからひハいつかり名
なかむなとのこまふはいそて小式部うちるをもおれ
はりける事をやと思ひていとあやまきさかんし
やうのいふやうふ成はとにりんへめまゝと御らんし
とくむへ我ふしもやまし里侍るとてなんとハとて
別すしうと我あり侍られハ御わ侍ふも此身わけまゝ
とてさ成まくうちふ我孫をわ孫ていみしかしこく
家成ほまくしうひとすわ家へけまを成とも

すへて何事もわきと以うくにき侍へうわくは
人のさゝ竹世ふりきの心きゝて志らはくなるを
はまあれ荒龍乃おしゝハ以とうしうくあわぬゝ事（昔ノ人ハ大臣ノ末し）
ふ孫さしを侍くしておかや老有侍りきま侍わ孫
きはれよものゝたうひめあわてそれむくひふうく
すゑハなきなるな必ずひと以ふめわしを女子の
うへ有り侍きたまゝとかくていと侍まなし必以よ
へ来まは侍らぬもうらぬれなきなひのきるしお
きうはあらめなと派なしのこひ孫侍く〳〵夢れ
わうわよ危とくめ孫あやきくひあくしく侍く孫
ふたりむんすしあわと人もとのめ又わまなりうこ

さはましおふるまひをうわまてもすはおと思ひは
しーすハられ君の生孫し時ありさまわふうく
思ひきわすしうとめれまんへよみえぬわあさのうハ
おほ侍のなくうおりひわうわつまゝさうハうは
たのみてはなう絶よはのちえしなわくわよこ
ふ後よいうしきめを見たくよひきもは人ひとわの
なあり〳〵わけまいりな原敵をの心よきうし
くんと孫ての〳〵けまはんれうちありおのみてとわ
孫つこまよまうくしてき孫へ来もれ侍わとまた
遂うとさう世侍うむ生世に小はゆくきは侍りてよ
以まハかくいましへ乃事をたとわきう孫ひ然

まことあなかしこの御ーんなへ我を給ふにおかりしにはな
りとよりかさはへ申すえさらぬむはひすわもよこ
さ波乃人民にけの悲をもつけひとことのこ給よき
あはれおかれ給け乃うにもあられまてこてり
なとはふらひに思給をみなふくもりしめ此きつ給
さしうふいれふつくまんはよおもひ我こえさはを
いましへの世乃たとへにもさこうきえんりは
そるうえんにまとらうくしきたとわあらむも
あしこ義度うなまとな我あやまわてもりのふあ
きこと乃こ給ゆかんたらん人をさも思ひよられうら
なりうむたあもひおりんし義りりのてうらは

みはとつかんえうまし我ゆも思ひな我るうりもおば
度しおか給けの者乃世此わるさるぬ人いたりふ（たうとし）
みしくもあまとひとわくはこなる時にはその
はうるまてな我はたあしともあはへりんめわさし
もあはまし身ことありうやくしくさせ我付あい
きやうなく人をまてまふふくんあは人たいとうち
とけうらくおりひく度な義わさりなんあはへ義（思ひつきなし両説）
おはくいあら給と人のふのとあはさ度あらはをも
むきをせんる小ゆへよしといひはまくにくちあり（ヨシアシキ）（ジン性）
うらぬきへ乃こ給をせあはへよめわれにをのく
えたるかゝはわてとは那なくえはうまとまうとわ

たてまつらし給ふに思ひまゐらくしくえうひ
おもりんに君をわうらきわさまなんたてまつとに
らう給のきさみくま義うハ紫ノ上ハこの君をみてなん
こまをうたひつかる人といふ西のわたらせとみん
思ひ侍ふめりとて又はまゐりシミヤメテニたくそてたのもしけ
なきもいとくちおし御とりわの給ありかるへけれ
人をおもひも御られぬりそこよりすこし物乃
んえそ物し給めるをいとちくもはひかはして
この侍らし給ふをもおもし心まて物し給へなと
上の御ひ御の小乃姉ふの明石上ノ言給よき様といとあはうこま
侍りしおをみたてまつ侍ます小侍従のことくきは

きこえ侍るめざましき事なりなとおかしゆゑ
さしらんりうまて侍しらんしまるへきこともも
あらぬをみるはいとおもそうはまへのたまりは
まことかへるまて君ハ恥ナシキャイノゆくさへ御覧ひならぬ方の
さはりの小義しぬを世のきこえもいとくるしく
侍らましくおもふ姉へらるゝを侍えな義さま入り
もてうくさま連まわ侍りのこよりとやさき姉へ源ノ詞もうれ
侍ためにハ何のんさしうハあらむたてこれ侍あわ
さ御をうちうひてもえこまうぬおかけ侍の御ぎりさ中
ゆ侍わきてえしらぬめわされもまつことわもちて
イナシルクヽけちえん小なとあらぬ侍もてあしともよう給侍れ

うなのめにめやすくなまはいとなんおりひなく
られしおほえきうすてもあはれんえはひかく
しおひとをたちましふにつきて人はたあさく
うしおうすわかわしさ御所なく浅も勘し給
めまことん心座ひくなんとの給はきてもさわやかよく
ようひとしりけまなと思ひはべけ給ふ対へ
わたり給ぬさるもいと座んしとあはれ御心さしのく
まのさぶらふめむふの所きまりし人もわらとにかくしも
ぐし給へるはわさ後はせあとりわかるえし給へ給
あうめてたけまさ宮乃法のさうりんへの御はしはせぬ
のみえめてさくてわこうまつ給ふ事もえなのめなつさ

めてはいかうしきなほわりなかめかりしかなしけち
みれおはきますといま一おもく心をうしく乱る志わ
うけたちやえ給り法きてもまのすくきはいとふけ
なう覚え給きは座んことなおくをあやはさ後にも
あうさめは世よましてふちまうる八事御用えすし
あらまいはへてせえうしめし浅ふしもあしたく
うのたゝこもわふかはやますゝを思日座は乃こう
哀よおかはけなき尼君もたゝふくちのうれ小大
ものたてと座うなわしひとしとをおたのみえそ給乃
世を思ひ座わはなりめぬ給へるを大将ぬけ君ては姫
宮の御事と思ひ出まいらするもあはれさわし

よりめありちようくおりしまはをいとたくふもあか
えは大かさ此御うしつぶふはきてこなくふは
さわぬへきおわりくよ楽かなきをのはりけりひ
有様をかん哀移よいとわりくおぼとぶ竹へ返一すち
あそうへ此まきふりかめしく世此ためしふ志侍
ちりわをそりしつぶ有わ竹へまとおさくりさや
うふも此ふかくハえくしす女房か小もおとなく
しきさすくなくわか座かなはあか（三ノヨキ人ハトカリ）ちびとのひさ
かるふうちそふやきされはめはハりとお侍くうは
志りぬまてつとひさふりひ侍く移ありひふけなる
御わさわといりひなくりなす事をのと座まよ

んき侍めふるハこ移此うちのあくハりしもみえぬ
わさなきはかり人志まぬ思ひそひさりんもまさ
悔こしとふんちゆぶけよとくこほれふうる事とも
侘もうちましまかりるへの人よひかれつくおなし
ありひもてなしふなさうか字房をたく涙くれハ
いりけたるはそひ中宮さまよ心りまさふ房わりたへ
乃はわはま移と院はいと見ふはりはみ竹ふこと此
はまさとひとりさ悔あり西甲をおりし此移うぬ清
本上なまさハかくはうるをもまりきてさありそ侍り
まかりうめ也はらんしゆうし侍くりまりしめ
とくのへさ移移り（十三ノ丁）はぎりしみのはあわさ悔りわ

なをいはひよくなしへきこえ給ひけしりてつきそ
給へるをかやうにて侍り此大将の君もくはしう有様
せなりけれは忠乃佛よういきしまゐのこゝろ延のとし
へぬれはとてもうくともわりそみえやうしたる所あなく
志侍やかな所我もやくしせさせうか心う侍くしう
人をも此いほ方をと歴ん事となくこなたすくまれ
おしきん給へふるゝかくいしおもうけもたまりさせ
のこゝろん思ひ出られまいらせ侍りは中方も名とおかは
すまうふのけはをいふうひあわすくれさるらうしく
志さなとゝ此たまりぬ人なりをふしき物にとりて
めんなるゝりんゆかふひて物かくさ歴しくにつとひ

給へはあはれさ歴とも乃さわくにおりしきをん
ひとりは思ひなかれかゝる事をましてけむ人見侍
かとなおりふしも侍なくんことなき侍かとはとわ
わすれたる侍くしましもあらさん人めの物ありわに
ありとみん事わするゝふわさはおかけなた心のしも
あまる給とみ事侍おわれわなむ歴と窓しく思ひはゆゑ
給へわ思への人乃きこゆる院よつらに集きこえく
さるひなまゐ給し人なまく法意をちゝみかいれ
りし侍よあのめ事わ給し侍しあら後へまゐてなと
えりしくみん事わ我まゐて侍まくの侍さこめ阿まし
は侍ひよわやうよわ院にもめさましとはおかり

みたまをすとやまし我にくしとさ成りあわ給
へなはいぬしくちおしくむまいさまんちすまきに我
え思ひたらるまゝたみれむわのわあからひつまよきわ
女房(女三ノ方ノ)のたよわりけれ有様なとも聞はた女房をなく
はめよ折りふうたう為りわくなたいのうへの御
返りひよはな我をされ給てなん此世のひとも〳〵まつひ
はさかるをきてはるうしけなくともさなもれを
思りきまうさましくさたくひ為義清男よこう
あたらさめとつゝまこれ小侍従といふはたちめし
なもいひすけましで世中さらさめなまよ我なくの君
りとよわかいあわてむりし我あそてさる為になも

むき給よくかゝりたゆことなく思ひわたりけり三月
はかりの空うらゝかなる日六条院に兵部(宮)卿宮衛門督
なと参り給へり大臣出給て御物語なとし給静
なる住ゐは此ころこそいとつれ〳〵にまきるゝ
事なかりけれおほやけわたくしにことなしや何
わさしてかはくらすへきなとのたまひてけさ大将の
ものしつるはいつかたにそいとさう〳〵しきを
例のこゆみいさせて見るへかりけりこのむめる
わかうとも見えつるをねたういてやしぬる
ととはせ給大将の君はうしとらの町に人〻あまた
して鞠もてあそはして見給ときこしめして

えたわうかしきこりの清まりにめさまあてつとく
しきうりしいほこなることとて清きうらこおまきは
帝わ路へつまな君ふめく人におかのわかまわまさ
世路へつまやなきくり物しほるきのこまふこま
りれ物わけこなさへまなちんやとの路て志ん殿乃（柏木若君ノ誕生ノ事）
めんしおもてきわつかたけのえやくしきわて宗
路すし許なまえさかさいかのく給へたわくわ座わ水
なとの御おほえなまてよしある給ふかよの名をと（オノカンノアナルヘシ）
たつのてたちいりおかおおかいひらの東宮弘母
兵部卿大臣の君なとこしさ給もみかさなわなるも
さ給くくよ人まわ給さらでの物志於ふ座うく

書なとはよりをふうしりしこ義白なりとけうして
母宮もえしつめ給はすまいておとく若宮もえおさ
先あへさめ給を上達部なわともわかみな殿給ふさ（夕霧柏木ヲトフラフ）
ふちいなとのみこまちてさろむあたるのをりひ
かそれあやしくかへ色れ口おしく覚しわさ
かわさ給はいとき座りくなわやられうれさ給（カルシキニミヘリ）
よかとの御路ふり大将あかんせ若かあかおわ路て
えならぬあものけふさ給よひ路ふ夕えへいと
きまけなわおさくさ給よくしけりならぬみまつ（大テイトニ心）
すなめまで所かりの人わりなわかなわ御庭せ
本色のいたく霞みこめたるりとくのひとにとよ

わが為花の木ともわけはくれけるまんさ乃うけ小すく（ガコオヲハリタルホヲ云）
まゐれむるきなきさよきけはしきけちめあるを
いとみはく我もさとうしと思ひおかなる中小
是心意のうわうあるたちまちしきを猶へ為あけりとふ
なまふ人なうわきれかうちいときよけよな為めきよ
ふ為さ為志たる人の男きいさくしてさなゆふ入り
見ふわうれしききかうしなきこゆ見りしのまよある
遂為桜乃うけよまれて人とまふのうへも忘てんお
いまたるを（源）かとくを宮（女三）もすくのおうらんに出て御
覧はいとらうあ為ふちへともえてうはお陣さ
なりけりとらうもみたまてうつふわのひたひ

はしくはたなたわ大将乃君も位のかとおりふ
あう例なうぬみたわうふしさおとおかゆまゆみえる
めハ人よわぎまわっくおりけよそ桜は為絶しれ
座て絶えたる（フルヒタルニ）おりさうしぬ散れすうつうをすうし
ふくえて気色りわひ義おきわ也へまうるくえくも
みえはもれきまけなはうちとけすうさりまふ乃
ゆるれやうりふわめくまなうちみはきてえかれ
よる枝すうしをしおわてみりしのなりれ之のの
ほとふ君孫ぬりん（柏木）の君はくきそ花みふわかりしを
ちはめわやはくうはちきそうなとれくまのひはく
宮乃はおのくさをえわめふみまはまん乃事あり

おさまらぬけはひともして色ゝこほれ出たるみすの
つまゝゝすきかけなと春のたむけのぬさふくろ
にやとおほゆ御木丁ともしとけなくひきやりつゝ
人けちかくよつきてそみゆるにから猫のいとちい
さくおかしけなるをすこしおほきなる猫のをひ
つゝきてにはかにみすのつまよりはしり出るに人ゝ
をひえさはきてそよゝゝとみしろきさまよふ
けはひともきぬのをとなひみゝかしかましき
心ちす猫はまたよく人にもなつかぬにやつないとなかく
つきたりけるを物にひきかけまつはれにけるを
にけんとひこしろふほとにみすのそはいとあらはに
ひきあけられたるをとみにひきなをす人もなし
この柱のもとにありつる人ゝも心あはたゝしけ
にてものおちしたるけはひともなり木丁のきは
すこし入りたるほとにうちきすかたにてたち給へる
人ありはしより西の二のまのひんかしのそは
なれはまきれところもなくあらはにみいれらる
こうはいにやあらむこきうすきすきゝゝにあまたかさ
なりたるけちめはなやかにさうしのつまのやうに
みえてさくらのおりもののほそなかなるへし御くし
のすそまてけさやかにみゆるはいとをよりかけたる
やうになひきてすそのふさやかにそかれたるいと

うほくしなよて七八寸ばかりなるほすまゑ竹へるは花の
すゝり箱ありいかなるをもちて庭にみてすりしはなよ
かれんのかく里給へるうバめりひきつらはあてやらう
ふけなわかりけふれハさやかなるはかくくらたん
抱けるもわらはあらはくおはしまわよ男拔なくは
見出逢の筆比ちるをおし こもあへぬ気色ともを
見なふとて人ゝあるをなふとも見えぬ性色ぬなる庭し
まこのいさくなけいみかへる里給へふおもちまて
なしなといとおひかりそまかくうほくしの人
やとぬとみしたわ大将いとあはれけるけ出まう
りひよしむら中にいとうはしくきたれハたゝんを

えみをてうちえは女房ゐる中ゟ庭をみひき入給
さらハいわのんちかもいとありぬんちし竹へゆら
猫乃はなちゆるしつまはん小もあるはうちなけける
ましてさりわんをまちあたる御簾をもてはとらす
かるてふれしなかわにまいあるむこし庭の中よまる
きゝう枝よ深よわも人小まきるへくもあらさわける
は君りひなとんよあく里て御はゆさらぬりなり
もてあしたま出しぬさは絶とらめし庭と大将いとゝ
あしくも何さはかるゝ事義んちのなくさめに猫こを
まねきよせてまきいとおたまいはふかうりしくそ
らうたげようちなくもなつかしく思ひよそへらるゝう

すきくきさやかにくはらんしなきて上達部
乃さいはひ給くしやこなるにこうとて春宮乃
女御にもおもてよいわ給へ是ハ兵部卿宮小宰相給ぬ
宮もぬ御誠里給て清相頭し給ふつまくの殿上
人ハすのこりわうらさめしてわさとなくつまくい
まちぬなしまうしやうれもれともさ給くま
そこのみつきにさらわまをはくあはをまのき人こう
ほまとわまふさ給へまうらも丸もうわしそ御
めりうけ侮いは薬へ替をいといさく思ひ日ゐめわて
屋ゝもすまはおふ乃木ありめを清きてなりめ屋給
大将をんおかにあやしうわけるらんの給うけ

思ひ出るまゝやはかなき思給ひとりしらぬなりける
有様をこそ候ハう給くしと思ふらんうしいそや
こなたの侍従わ侍まゐさはあはましかめに物をと
ねりふよりくまはこう世のおもしろき乃程すわたうち
うちの侍心さしめぐらきなうなはおりけまとおもひ
おりをて物うちと乃男さおかしくいふけなきハ
ららん蓑やうなきをかしう給めく姿やうあるをやと
おもひおとさらんの君ハよ給侍の侍えなをもおさ
おきたとこきはおかしぬ物乃ひきまはおかれこふも
うれしとみえきまるまも我着まかの心さし乃きるしわは
つまやと契らいしかんちしてあるはのことおかゆ

院は昔物語しいでて語ひておほきおとゝのよ経給乃
まつりたちおひてうちまけのさためにて語し
中にまかなんえをよりは年わすりのなきすゑ
はさへ侍るましけきに物乃すちくな残こよかうわ
らかいとめもをまりはりしこうようゑて侍さ
の語へはうちほてゑてそうくしきかきには
めつらく侍る家のもきのさしもいつさへ侍らむ
後乃世はためことなかすなくあそ侍ぬへけきと
中語へそいのてよ何すも人りとな侍けちめ
在はさるしはさるへきおわ家のつて庵なとり
うおとしめいまたらんあうけうそはらめなをたる

寒語侍りさ後の自ひ座にはきすなるとみなす家
ふもあらは人にあらひそいよりわのすみり心残
まけはは人にもの〳〵語りんはすふつきてお其と
なんゆるし語ふりわんなひし常ゞへ其とおりひ
めくらさをはいとことよなく侍はたわするゝなる八其
おはのおとも折りひとさしはまきほむまはのふさうわて
侍てそ語ぬ大将君ひとり車よそ為比雅経し
折ふな残は法のつまさしくかは上院よ其わてまき
いれへきあわらわ語け比やうあらむいせまのひま
まちは侍て花の折わすくさはいまゝ物の語つゐに残
恵おもしゑをてる月乃うちにこさらもよきて宰わ

給へとうらひち我宗をのくわの所〻花の雑此
物語し給ふて京のはつ乃なつは成かしけまし
流ふは形これ春よの〻物きさを給ふめわなりの
流覚えのこと形るかめわりしこの京いりの〻おそ
けもんえらとれなきひなく分かりしまわ給へ所に
さしもあらてくし給よさもんより心をえまし
あいなくいへはるめんくしきてりいふそかさは
はらんこなさえさ給あいわてたほしこそ給へ所
むほひの乃く能めはりわりものあへりめまし京なれ
うらくに法きていと座むことなくおもひ来こく
給へ所もれをとかふお物へといそはなり給るまへ

なんかなてはわいとくおしけなくおわりくれ所
をやさ給い世りをなへさるぬ人のはおおかしを
わわかこさわきかわやといとおしかる所
柏木
いりの玉れは能の木法ふ学の桜をふて絡くる
とはきぬま此名のはくひとりおとまらぬ心よ
おやしとおほゆるりうし心にすさひよいは京一首
いそあちむなの物おほりひ座されそちとおもふ
夕霧
たか山木よ絡くらさこせるたことわをいりてあ
まかの乃きふあくへ義まわなまるりひたをもむきた
りこやまといらへてわつらしけまなことゝり
いまきは来ぬことりりいひまきらりしてその

なのわすれぬかんの君ハおほかたいとのくしのんかし
の基ゐ継給ハてすりのし給ひなほおりふしんかち
ありさとしはすなはほまぬをすなみ人座わなられ
さうしくしんかた義物も〳〵あまと家为うへ
うわまそなとの思ふすかあきさきむかうのこん
どうわするにはタまわらしいたく物思ひしくそ
いりなかんおほ里にまうさはかわかそもなかれおなる
けにつける海をたまうんともあくもつきさまさき給へる
きみの人ミうちわすめかもたりやは義物いえうる
たうんのうけろひもうなくしよよなの給へる
ともすくさもめの陪従うしひはく給やうとは申

なと思ひ給ふかさなくみかどのうちに何ゆへの
事につきてすりのくみかとんまへわとしるしせ
まほへてさせむ〇いさくいふを入はわ給へ許御の
かく座わ給て一日のうちを入りさうかまて見るきの
ゆをせつきいわてえしかいとくいのよ見おと
し給ふんうれ夕まわえあわんちうよく〳〵—
あやなくゆふをなりめならしまへ給ふとおきそ
まうに見そおもぬ事け哉ハ志けまとも名残惡
しきをみ乃中ふうけとは遣と侍給ハ一日の心も
志つきいたるよけつ事れなりめふうそうかに物しか
おまへ小人志けかぬぬおと事ハ此文を見て参りて

こゝに人丸かくのことき物によそへてひ給し時ゝう
まうけはしく侍まんくるしけなる有様も見給へ
はまはんもやそひ侍らんとおほゆるのこゝろなるう
おもわうらくなん思うちわらひて書きゆまいいと
うるてあはれなるもいふうなかゝ物ゝ様もなきよ
の給ふて猶ことひ給きと御消息かひは見えきぬと
いひたる所をおもきましうわしことのはまをおか
しおもせし給くに御おりてあの見ておとくの
はかのわことのついてことに大将よ見えしたまふな
いまけなさ御 有様なめまえなのはつことわりは
しそみ奉る度うもあわれなんといまし兎ゆ見ゐを

おりし思ふに大将のさ庭なうわしとうる宮に
たうん明いうにおかしめ給りんとひとの見奉わりん
うすなるおかさそ見ゆうわやさ給ふ心のうちう
おさぶみわく侍つゝまわもはさしいゝへなけまふ
すさましくこのそきゝ遊へきゝうにもおもひい
ひ義このひて例のうく一相ハ侍なしうかを
なんめさ成まうとゆるしきこえさわしうえにも
おうぬやいうにはなうけくし度とりやまうに
りまおふそ
とさうよいゝ侍りなりそう山桜奉るに然枝よ
おもひ給うけきとうひなきうすなとはわ